

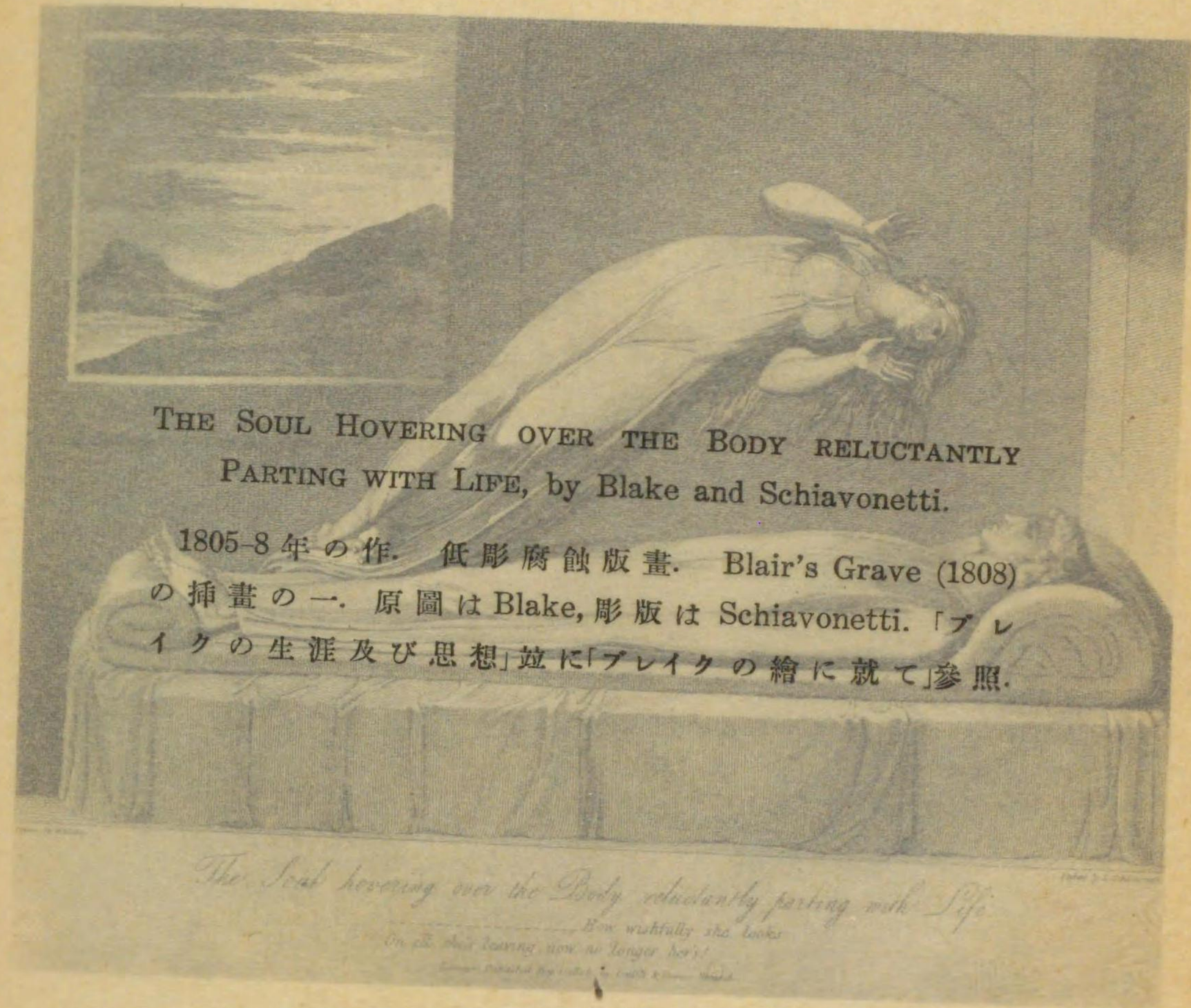
繪に就て参照.
 Little Tom the Sailor (1800) の Tailpiece. ランド
 1800 年の作. 著者白蠟版畫. Hayley の Ballad
 ii. LITTLE TOM THE SAILOR, by Blake.
 1822 年頃の作. 白蠟版畫. ランドの繪に就て参照.
 by Blake.
 i. THE MAN SWEEPING THE INTERPRETER'S PARLOUR,
 TWO ENGRAVED DESIGNS, by Blake.



i



ii

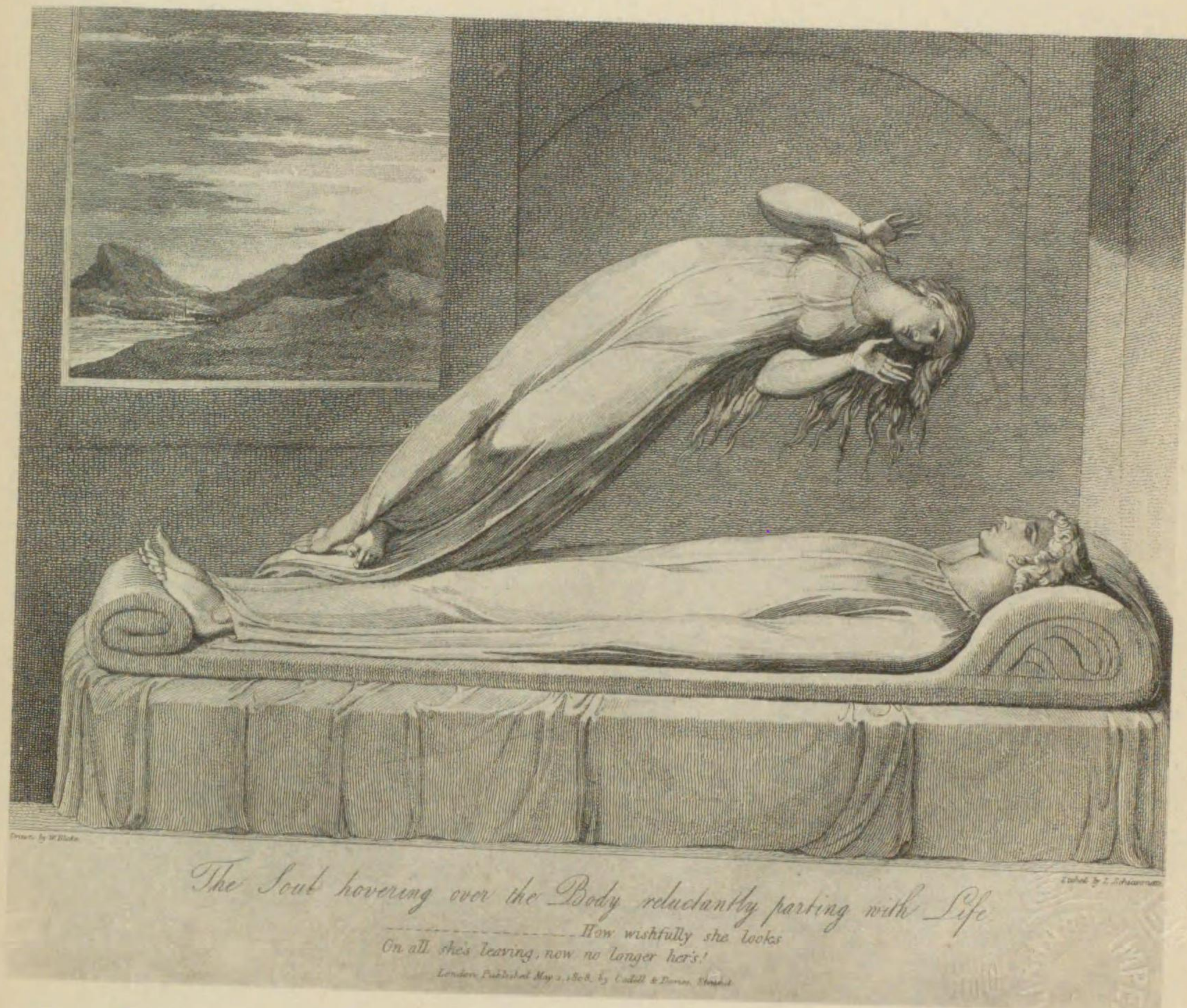


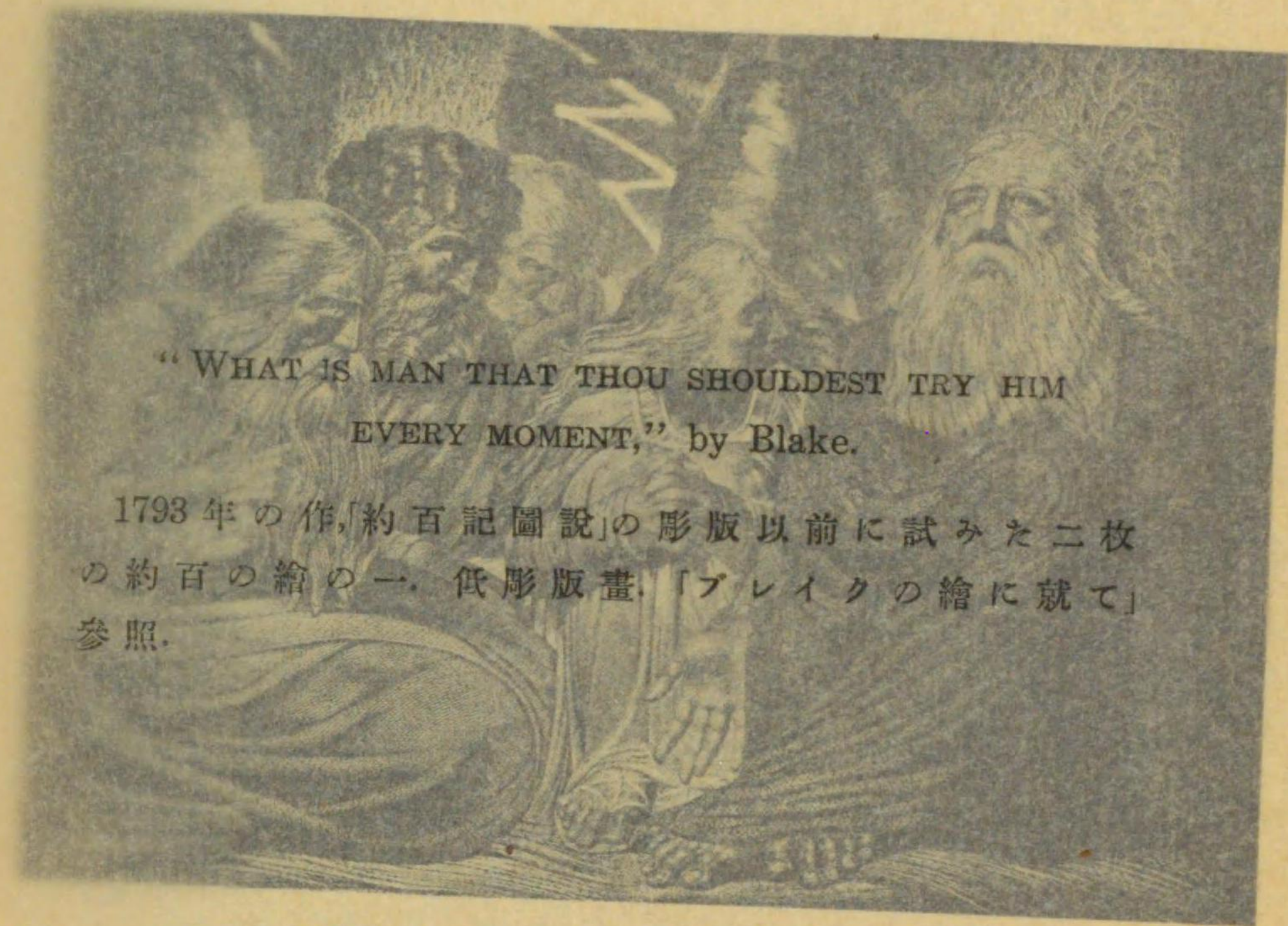
THE SOUL HOVERING OVER THE BODY RELUCTANTLY
PARTING WITH LIFE, by Blake and Schiavonetti.

1805-8年の作。低彫腐蝕版畫。Blair's Grave (1808)
の挿畫の一。原圖はBlake, 彫版はSchiavonetti。「ブレ
イクの生涯及び思想」並に「ブレイクの繪に就て」参照。

The Soul hovering over the Body reluctantly parting with Life
See wistfully the look
On all this bearing, are no longer here!
Engraved by Schiavonetti from the original by Blake.

THE SOUL HOVERING OVER THE BODY RELUCTANTLY.
 PARTING WITH LIFE, by Blake and Schizvonnetti.
 1802-8年の作。伝説的銅版畫。Blair's Grave (1808)
 の挿畫の一。原圖はBlake, 彫版はSchizvonnetti. ラン
 トンの生涯及び思想にアトムの繪に就て參照。



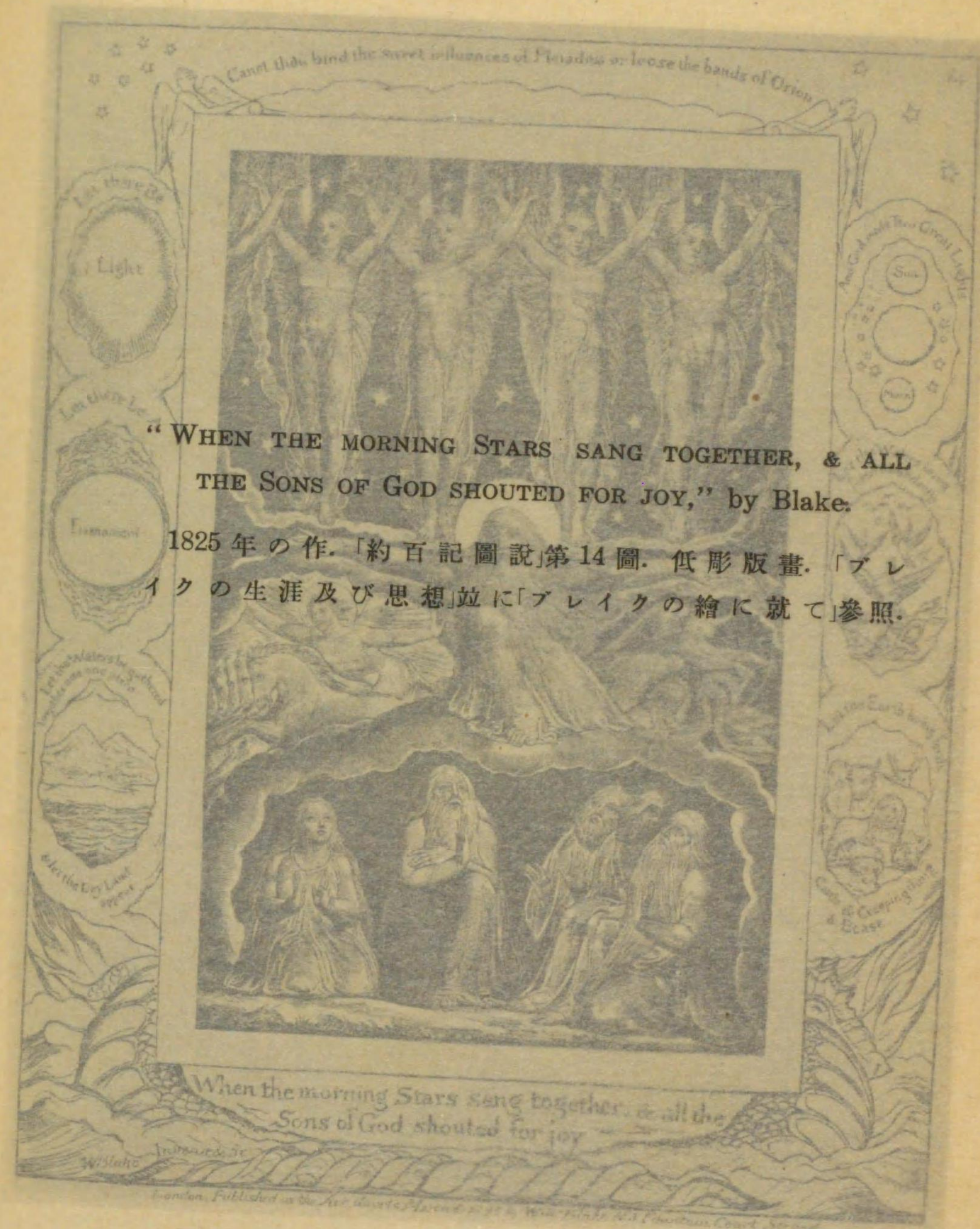


“WHAT IS MAN THAT THOU SHOULDEST TRY HIM
EVERY MOMENT,” by Blake.

1793年の作、「約百記圖説」の彫版以前に試みた二枚
の約百の繪の一。低彫版畫。「フレイクの繪に就て」
参照。

参照
の約旦の橋の一。此彫版畫「マンマ」の橋に就て1738年の作「約旦」の彫版以前に試みたる二枚
EVERY MOMENT," by Blake.
"WHAT IS MAN THAT THOU SHOULDEST TRY HIM





“WHEN THE MORNING STARS SANG TOGETHER, & ALL THE SONS OF GOD SHOUTED FOR JOY,” by Blake.

1825年の作。「約百記圖説」第14圖。低彫版畫。「ブレイクの生涯及び思想」並に「ブレイクの繪に就て」參照。

When the morning Stars sang together, & all the Sons of God shouted for joy

1839年の作。新巨野圖説14圖。此版畫。17
 17の半扉及び思慮圖に17の線に就て参照。

"WHEN THE MORNING STARS SANG TOGETHER, & ALL
 THE SONS OF GOD SHOUTED FOR JOY," by Blake.



英國で相見たブレイク學者の思ひ出

MUSEUM の BINYON 氏

私が初て Laurence Binyon 氏に見えたのは倫敦に着いて四個月程経つた頃のこと、一昨年九月末の或日の午後であつたと記憶する。私は在外中努めて人を訪問しようとしなかつたので、歐米の地に擴めた私の交遊の範圍は自然極めて狭少であつたが、私が彼地で面晤の機會を得交誼を結んだ數多からぬ名士無名士の中 Binyon 氏は豫て私の第一に會ひたく思つたゐた人の一人であつた。それは氏が英詩の正統を守り纖奢溫柔の句を行る高踏典雅の詩風と Blake に関する著作とによつて永く私の心を捕へてゐた上に、東洋美術の愛好者並に研究者として二重の親しみを私に感ぜしめたからであつた。

Binyon 氏は私の倫敦着後間もなく通ひ始めた British Museum の構内に住み、British Museum の Department of Oriental Prints and Drawings に勤めてゐたから會はうと思へば何時でも會へたのであるが、新たな土地に落つく時に外國人の誰もが經驗する煩瑣な雜務や、名所見物や、數度の轉宿や、嘗て文部省に勤めた緣故で着英匆々仰付かつた聾啞教育會議に関する用務や其他で心身多忙を極

め、それに初めて人を訪問する時にいつも感ずる臆劫さも手傳つて私の Binyon 氏訪問は延び延びになつてゐた。ところが八月上旬偶然友人前田君の宿で相見た巴里の畫家長谷川路加君によつてその實現が早められることになつた。

長谷川君 (M. Luc Hasegawa) は東京美術學校日本畫科の出身、數年前から巴里に定住して居る、巴里の畫家仲間にも名を知られてゐる努力的な日本畫家の一人で、當時京都大學澤村助教授の指揮を受けて British Museum に佛畫の模寫に通つてゐた快活な青年であつた。同君の模寫してゐた支那の佛畫は Department of Oriental Prints and Drawings の所管であるから、そこに勤めてゐる Binyon 氏や Waley 氏を勿論同君はよく知つてゐた。長谷川君は Binyon 氏のために朝晝夕の London fog の畫を繪いたことや、近く Binyon 氏の世話で倫敦で個人展覽會を開きたい希望を持つてゐることや、Binyon 氏が親切で、大家ぶらず、よく同君と一緒に散歩に出掛けたり、茶を飲みに行つたりすると云ふことや、Binyon 氏が佛蘭西語を達者に話すと云ふことなどを私に語つた。私はこの人に Yone Noguchi の紹介状と私の名刺を託し、この人を介して Binyon 氏に面會の希望を申入れたのであるが、双方に旅行其他障ることのあつたため私が素志を果したのはそれから又一月餘り経つた後であつた。

私は Museum で Binyon 氏に會つた。其日私は例に依つて

Museum に模寫に出掛ける長谷川君に Binyon 氏の office room に案内して貰つた。Binyon 氏の室は Entrance Hall から右に曲つて Grenville Library, Manuscript Saloon, King's Library を通り過ぎ、階段を昇り、corridor を渡つて行く一番奥の King Edward VII's Galleries の北端、版畫及線畫部の Students' Room の階下にあつた。室の入口の所へ私を出迎へた Binyon 氏は私を室内に導き入れて desk の近くの椅子を私に薦めた。Desk の上には浮世繪其他の版畫が堆高く積み重ねてあり、背後の硝子戸の箆つてゐる高い書棚には美術書が一杯つまつてゐた。Binyon 氏其人は中肉中脊の、英國式の面長の中年の紳士で、大人しい灰色の lounge を着てゐた様に記憶する。舉止言語の氣持のよい grace が先づ私の注意を牽いた。そは素より氏の天稟によるのであらうが、人との交渉應接の機會の多い Museum 吏員としての、又知名の文人としての多年の生活に依つて磨き上げられ、益々光彩を放つに至つた氏の美質であらうと思つた。氏はともすれば聞き漏らしさうな、低い、併しふくらみのある聲で言葉尠かに語つた。私は氏に沈黙の尊貴を信ずる繊細柔和な魂を感じた。氏は感慨に禁へぬ様な面持で「Blake が世界各地で鑑賞され、研究される様になつたのは全く不思議ですね」と語つた。Geoffrey Keynes, Darrell Figgis, Foster Damon, Yeats, 柳宗悦等の Blakeans や、共通の友人矢代幸雄、佐藤清等諸氏のことも

吾々の話頭に上つた。吾々はまた Frederick Hollyer の版畫のことも話した。そして Binyon 氏は Figgis の近業 The Paintings and Drawings of William Blake と Botticelli の矢代君とを口を極めて賞讃した。約三十分間さうした雑話を交換し、再會を約して其日は辭去した。

Laurence Binyon

Laurence Binyon の署名

其後私は屢々氏に會ひ Blake 文献及び Blake の繪の閱覽乃至蒐集に就き氏の懇篤な配慮助言を得

利益する處尠くなかつたが、氏はいつも温厚懇切、私の初對面の日に受けた印象を裏切らぬ磨き上げられた gentleman であつた。Yone Noguchi も Max Beerbohm と Binyon とを比較して次の様に云つてゐる——

私は彼に(筆者註、Beerbohm のこと)直接、彼の人格に接するのを非常な光榮に存すると宣言しますと、彼は異様に苦笑しました、その苦笑は修養された英國の交際社會では、斯る生な粗野な阿諛の禮式は禁物であるとの非難と讀めました、彼は靜寂の表現であつた、彼は平安な稀な藝術であつた。其の點では私の舊友詩人ビンヨン(ビンヨンは夫人と共に隅の書棚の側で、混雜の中から、冷やかに笑ふ蓮華の如くに起つて居るのを私は發見しました)の清淨教主義に

一致を持つて居ります。此の種の人とは同じ英語を使つて居ても、米國の社會では兎ても見ることの出來ぬ所で、古くて長い上品な英國の修養が『萬人に一人の誇り』として創作したものであると云ひたいのです。(「英文壇の伊達者」)。

Binyon 氏が Museum 及び自宅で私に見せられた珍しい Blake 文献の中で特に私の注意を牽いたのは Mrs. Richmond の所藏に係る Job の proof と或る地方の圖書館から鑑定して貰ふために Binyon 氏の許に送り越した Songs of Innocence の original edition とであつた。兩方共完全に保存された珍品で、前者は曩に一部 Tate Gallery で展覽に供したことがあるもの、後者は British Museum のとは違ふ珍しい copy で評價價格 200 磅と云ふことであつた。今一つ思ひ起すのは、これは Blake 文献ではないが、Binyon 氏の宅で見せられた Edmund Dulac の繪に關する私の失敗である。それは Dulac の描いた Binyon 氏の caricature であつたが、實に巧に寫樂を眞似、水繪ではあつたが實に器用に木版刷の浮世繪の effects を寫し得てゐたので、一瞥して私は Binyon 氏に「寫樂がありますね」と云つたのであつた。Binyon 氏が黙して答へないので不思議に思ひ近寄つてよく見ると、それは袴を着、チョン髷を結つた Binyon 氏であることが分り、落款の文字も勘亭流に豎書にした Edmund Dulac と讀めた。「あゝ Dulac の描いた貴方の caricature ですか。

迂潤でした」と云つて笑ひ乍ら Binyon 氏を顧ると氏は静かな微笑を湛へた唇を開いて「ええ Dulac はこの通り器用な男です」と答へた。

Binyon 氏は 1869 年の生れ、三十五年の永きに亘る氏の文學的生涯の結實は尠くないが、Blake に關する著作は次の通りである——

William Blake, Vol. I: Illustrations of the Book of Job, with a General Introduction. London, 1906.

The Drawings and Engravings of William Blake. London, 1922.

The Followers of William Blake. London, 1925.

The Engraved Designs of William Blake. London, 1926.

A. E. 及び YEATS と語る

私が愛蘭の巡遊を思ひ立ち、朝の直通列車で Euston を立つて、車窓から中部英蘭平野の麥秋を眺めながら Holy Head に行き、そこから Irish Channel を渡つて Dublin に着いたのは昨年八月二日であつた。種々の事情で極度に切りつめた計畫の下に企てた愛蘭旅行に對し私は素より多くを期待することは出来なかつたが、愛蘭の原始的な自然を一瞥し、愛蘭人の人情風俗の一斑を窺ひ、重なる美術館、圖書館、及び Abbey 座の愛蘭劇を観た上に、一頃熱意を捧げて耽讀したことがある、そして今尙全然敬愛を失はぬ Yeats や、

A. E. や、Dr. Hyde や、Lady Gregory や、其他の文人學徒にも會つて見たい、もし彼等の總てに會ふことが出来なければ、せめて Yeats にだけなりと面晤の機會を得たいものだと思つてゐた。併し Yeats とは永らく文通を斷つてをり今は居所さへも知らなかつたから、愛蘭滞在中に果して彼に會へるかどうかと危んでゐた。ところが私の着いた翌日、Yeats が Galway の別荘から Dublin に歸つて來たので、偶然私は素懷を果す機會を得たのであつた。さうしてそれが全く偶然であつたために、一層私は嬉しく思つた。

Dublin に着いた翌日、八月三日の午後私は同地の雜誌記者 R.M. Fox 君に伴はれて A. E. を *The Irish Statesman* の編輯事務室に訪ね、そこで初て Yeats の消息を詳にし、同日 Yeats の Dublin に歸つてくることを知つたのであつた。Fox 君は Ruskin College 出身の Londoner で、童話作家の愛蘭婦人と結婚し、Dublin に落ちついて雜誌記者をしてゐる人、*Factory Echoes and Other Sketches* と云ふ著書もある。倫敦の知人から私の Dublin に行く日時を知らせてあつたので前日夫人同道停車場に私を出迎へ、夜遅くまで市内各處を引廻して呉れ、愛蘭や愛蘭文學の現状を話して呉れたのであるが、同君は A. E. の主宰してゐる前記の雜誌に關係して居り、豫て A. E. を知つてゐたので、彼に紹介の勞を執つて呉れたのである。A. E. は愛想よく私を迎へ、私に事務机のそばの

安樂椅子を薦め、三十餘の年恰好の息子を相手に時々校正其他雑誌の仕事をして、愉快に二時間ばかり私と話した。私はその時まで彼の作物や J. B. Yeats の描いた肖像や、寫真によつて瘠軀寡黙の神經質の詩人を想像してゐたのであるが、今私が目のあたり見、詩話雑話を交換してゐる A. E. は私の想像に反してよく肥つた、又よく話す、氣の措けない、好々爺と云ひたい様な柔和な人物である。彼は云つた、「Yeats や私などは今では舊時代の idealists と云はれる様になりました。私等に續いて Colum や、Robinson や、O'Sullivan 等の作家がいましたが、彼等ももう中老格の作家になり、現在は O'Flaherty や、O'Casey や、Joyce など realists の時代です。若手の詩人では Higgins や Clark などがいい作家と云へるでせう。それから、まだよくよく若い男ですが、私の雑誌に時々作品を発表する O'Connor もいい素質をもつた有望な詩人です。勉強家で Gaelic が出来るのが彼の強味です。時に私は日本の詩のことは少しも知らないが、日本の詩はどんなですか、日本の詩にも韻や規則正しい rhythm がありますか。」そこで私は日本語は母韻が多いために韻の効果が尠いから日本の詩は英詩の様に韻をふまないと云ふこと、日本語は accent が英語の様に明瞭でないから英詩の rhythm の様な rhythm は日本の詩にはないけれども、種々の音数の組合せにより、又音樂的な言葉を撰擇して melodious な調律を作

り出すことが出来ると云ふこと、其他日本の詩に關する基本的な知識を彼に傳へようと努めた。そして最後に、彼の希望によつて、私の試みた彼の詩の日本語譯を朗讀して聞かせたところが、朗讀が済むと注意して聞いてゐた A. E. は意味は分らないけれども確に調律の美が感じられると云つて喜んだ。

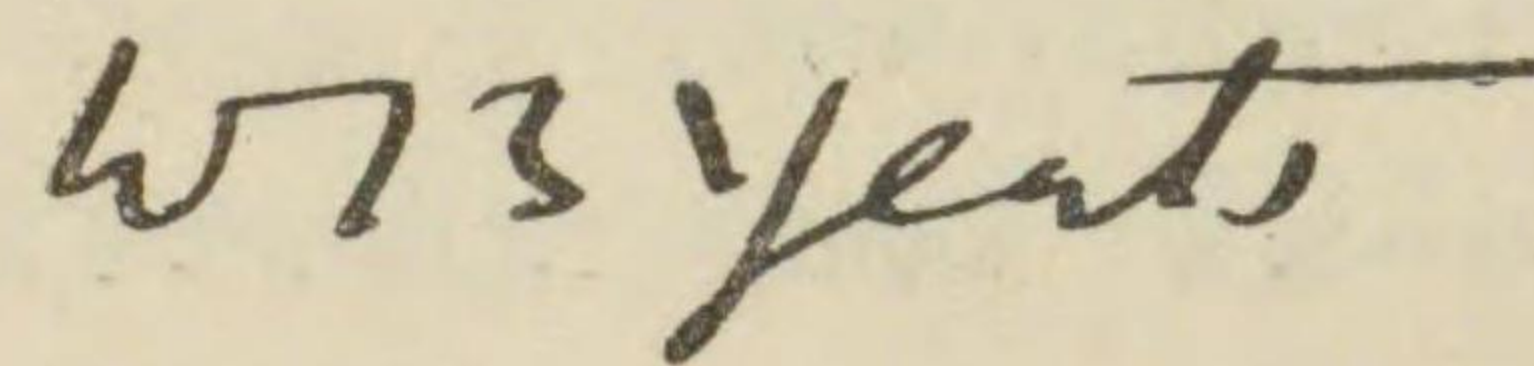
それから吾々は彼の最近の詩集 *The Voices of the Stones* のことや、Yeats のことなどを話した。Yeats は A. E. の少年時代からの親友で、その詩才は彼の夙に推賞して止まぬところである。「Yeats は全く眞正の詩人です。併し彼は今 Senator をしてゐるので忙しいらしいですよ。近く愛蘭自由國の貨幣が鑄造される筈ですが、Yeats はその方の仕事、貨幣制度調査委員會の仕事があり、又 Galway には intellectual friends がゐないので寂しいのでせう、ちよいちよい Dublin に出て來ますよ。Yeats は Galway の古城を買取つて別荘にして夏の間そこに行つて居るのです。」

かうして彼と話してゐるところへ其日 Dublin に歸つてくる Yeats から A. E. 宛に電報が届いて 'Come in to-night' と云つて來た。丁度いいから今夜一緒に Yeats を訪ねようと云はれる儘に、私は喜んで彼の申出に同意し、同夜 Abbey 座觀劇の豫定を變更し、計らずも與へられた老詩伯訪問の機會を捉へることにした。

Yeats の家は Dublin の中央 Merrion Square の八十二番で

A. E. の office のある Plunkett House の一軒置いて隣であつた。宿で夕食を済して A. E. と示し合せてあつた時刻、九時半に行き着ける様に九時頃 Municipal Art Gallery の向ひの自分の宿を出た。さして遠くもないから徒歩で行く。行く行く私は嘗て見た寫真よりは老びまさつてゐるであらう彼の風眸を想像しながら、暮れ憫む北國の夏の夕の薄明の中をば、愉快的な外氣を楽しみつつ Merrion Square の方に徐ろに歩を運んだ。さうしてかうした夕暮の訪問は薄明の詩人 Yeats に最も適はしいことだと思つた。

灯ともし頃に私は白く塗り更へられた Yeats の家の玄関に立つた。取次の女中に案内されて Hall から二階にある Yeats の書齋に上つて行く。途中の壁には繪が澤山懸けてあつた。珍らしい、良い繪が多くあるらしかつた。戸口のところまで出て来て手を伸べて黙つて私と握手した Yeats は心持背の躡(に)んだ、豫期に反し



W.B. Yeats の署名

て大きな男であつた。繪や眞寫で見る Yeats よりはずつと肥つて居り、髪は白いが、水々しく丈夫さうに見えた。三十疊位の廣さの大きな部屋の奥の方、窓に寄つた所に desk とカナリアらしい鳥の入つてゐる籠を据え、中央に應接用の椅子卓子を置き、左右の壁に添うてしつらつた書棚には古くはない立派な本が一杯入れてあつた。そして

mantel-piece の上には父や兄弟や友人の作らしい繪が澤山懸けてあつた。先に來てゐた A. E. は自分の掛けてゐた Yeats に近い安樂椅子を私にゆづり、自分は遙か遠くの椅子に退いて Yeats と私の話すのを黙つて聞いてゐた。Yeats は形式的な挨拶を交したり、平凡な話柄に就て騒がしく話し立てたりするのを好まぬに違ひないと思つたから、私は椅子に腰を下した儘何を云はうかと考へながら暫くの間黙つてゐると、Yeats の方から口を切つて「貴方は私の本を譯して呉れましたね。大分前のことで、何時であつたかはつきり覚えませんが」と云つて話を始めた。彼は低い、ふくらみのある、力の籠つた聲で靜に話した。吾々は最初共通の友人、Noguchi 氏や、Waley 君や、緒方君や、三浦君のことを語り合つた。それから吾々は英吉利や愛蘭や印度の詩人のこと、Abbey 座のこと、Yeats の妹のやつてゐる Cuala Press のことなどを話した。Abbey 座は今でも Yeats が manager をして居るので、日本現代の劇作家の作に適當なものがあれば Abbey 座で上演させて見たい、今日本にいい劇作家がゐるかと思つた。そこで私は今日本には山本、菊池、谷崎其他優れた作家が段々ゐるが、歐米近代の戯曲の影響を受けてゐる日本の現代劇は、勿論、Yeats の好きな「能」とは全然種類の違ふもので、一般觀衆には却て近づき易いであらうが、ここで上演するとなると脚本の選定や翻譯に相等骨が折れるであらうと答へた。そ

れから Yeats は私の贈った芳虎の四十七士の錦繪を擴げて「Russell 君、これは Masefield の書いた The Faithful の義士達だよ、日本人が義士達の vengeance をあの様に讚美するのは日本人が vengeance そのものを喜ぶのではなくて、vengeance の motive, point of honour を尊重するからなのだ。」と云つて説明する。A.E. は印度乃至印度思想の知識には富んでゐるが、日本や支那のことは Yeats の方が明るいのである。Yeats は又 Waley の譯した Genji (Yeats は Jenji と云つてゐた)を賞めた、さうして日本は愛蘭と違つて立派な文明を遠い昔に完成した先進國だと云つて日本を讚美した。

そこで私は彼が勧めた酒杯を措いてかう云つた、「先年貴方が亞米利加に講演に行かれた時、日本では皆が貴方の來遊を待つてゐたのですが、とうとう見えなかつたので、肝入役を努めた Yone Noguchi や、亡くなつた厨川博士や、柳澤君やは云ふに及ばず、吾々一般 Yeats 愛好者は非常に失望したですよ。一度日本の能を見に出掛けてはどうです。私は初て貴方の The Shadowy Waters を讀んだ時から貴方の劇に貴方の賞讃して居られる能の要素の多いことを感じてゐたので、能と殆ど變らない近頃の貴方の作物、dance plays は劇作家としての貴方の當然の歸結であると思つてゐるのです。ほんとに一度日本に能を見に出掛けてはどうですか。」Yeats は答へた、「ああ覚えてゐます。其頃日本にゐた友人の Cousins 君から話があ

りましたが、御話の様な事情を知らせた手紙はつひ受取らずに歸つた様に思ひます。何でもあの時は宿につくなりいつも七八人の新聞記者の訪問を受けてすっかり弱つて了ひ、妻などは home-sick を起して早く愛蘭に歸りたいと云ふし、旁講演が済むと急いで歸國したのです。日本に行つて見たいが、今の處何時行かれるか分かりません。」

一時間許話してから、私は A. E. と共に Yeats に暇を告げた。Yeats は今朝 Galway の家を立つ時階段から足を踏み外して負傷したとて杖にすがつて吾々を階段の上まで見送つて云つた、「下まで降りると上れなくなるから失禮します。さようなら。」

A.E. と並んで宿への歸るさ私は思つた——Yeats も A.E. も如何にも愛蘭人らしい詩人だ。そして Yeats 程書き物から受ける感じと、會つて見た本人から受ける感じとが、ちぐはぐでない作家は尠い。彼は全く夢と現實とを區別しない幻想家だ。彼が夢に生きる詩人であるからには、彼が日本の能を見ると否とは、彼の Blake の研究や解釋の正否如何と同じく、結局彼に係はるところが無いのかも知れぬ。彼は全く A.E. の云ふ通り眞正の詩人だと。

A.E. (George William Russell) と Yeats は夫々 1867 及び 1865 年の生れ、Yeats の Blake に関する著作は次の通りである——

Poems of William Blake, edited with an Introduction. (Muses'

Library). London, 1893. Reprinted in the same and in Modern Library (New York).

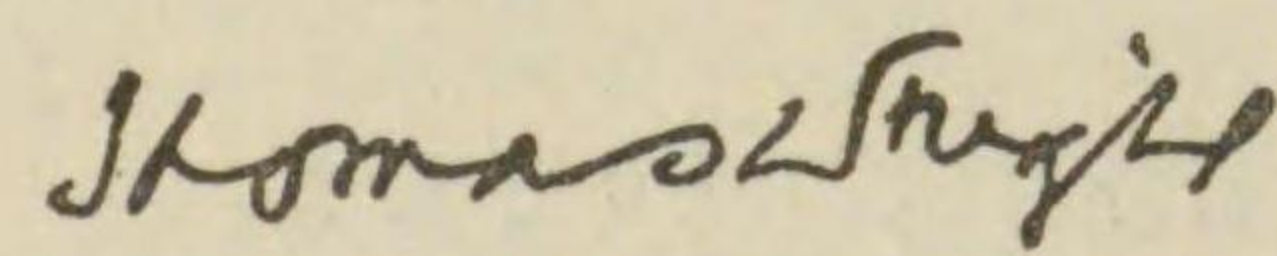
The Works of William Blake, Poetic, Symbolic and Critical, edited with lithographs of the illustrated "Prophetic Books" and a memoir and interpretation, in collaboration with E.G. Ellis. 3 vols. London, 1893.

Ideas of Good and Evil, including "William Blake and the Imagination" and "William Blake and His Illustrations to the Divine Comedy." London, 1903. Reprinted.

BLAKE SOCIETY と THOMAS WRIGHT 氏

私が愛蘭から倫敦に歸つた翌日、1826年の八月十二日に、strikeの爲めに延期されてゐた Blake 協會の annual meeting があつた。会場は Blake の葬られた Bunhill Fields の向ひ、City Road の Wesley's Chapel、私も同宿の Y 君を誘ひ合せて出席して見た——secretary の Thomas Wright 氏を始め、多くの Blakeans に面晤の機會を得るのを楽しみにして。

定刻の少し前に会場に着く。未だ誰も来てゐないので寺男の案内



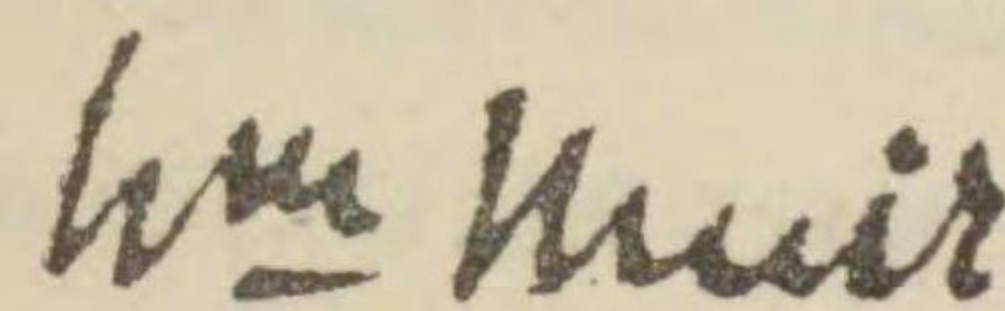
Thomas Wright の署名

で控室へ行つて休んでゐると、ややあつてフロツク姿の小柄な白髪

の老人が入つて來た。前々日の

Cowper 協會の例會で會つて知つてゐる Y 君がそれが Wright 氏だと云つて私を紹介して呉れる。氏は 1859 年の生れで Cowper の home であつた Olney の Cowper School の校長の職にある。何となく學校教師の臭ひのする、氣急(きせき)しい、苦勞性の人の様に見えた。併し氏の Cowper, Defoe, Pater, Payne 等文人の傳記に對し、又 Cowper Society, John Payne Society, 及び Blake Society の幹事としての氏が多年の活動に對し、英文學の研究者は氏に感謝の義務を持つものであることは云ふ迄もない。氏は近く Blake の評傳¹も出すと云つてゐた。

午後三時に Chapel の會堂で會が始る。會衆は男女合せて二十名許、中に Blake の facsimiles を出版した William Muir 老も交つ



William Muir の署名

てゐた。此日の Chairman は *Poetry Review* によつて後進の誘掖に努めて

ゐる Galloway Kyle 氏。最初に Kyle

氏の現代青年詩人に及せる Blake の影響に關する講演があり、次に Wright 氏が立つて最近に出版された Blake 文献を逐次紹介批評し、最後に自著の誤謬の訂正をした。講演はそれで終り、四時過別室に移つて一同茶の卓について寛談の後、Rev. McNeal の案内で Bunhill

¹ *The Life of William Blake*, by Thomas Wright, 1929.

Fields Burial Ground を見に行く。Blake は Bunyan や Defoe と一緒にこの共同墓地に埋められたことは確かだが、彼の埋葬された地点は最近に至るまで判らなかつた。私も前年倫敦到着後間もなく數回この墓地を訪れ、Gilchrist が Blake の墓地として傳へてゐる七十四番墓地のあたりを尋ね廻つたことがあるが、Blake の墓標らしいものは何も見當らず、Gatekeeper に訊ねて見、Gatekeeper の賣つてゐる案内記 (History of the Bunhill Fields Burial Ground) を調べても見たが、つひその所在を明かにすることが出来なかつた。ところが傳記の研究が作物の解釋鑑賞に多大の光明を投ずるものなりとの信念の下に多年其方面の調査研究に従つてゐた Herbert Jenkins 氏によつて漸く Blake の埋葬された、正確な地点が究明された。Jenkins 氏は一昨年末に出版された *William Blake, His Life and Personality* の中で Guildhall の Register に就き研究して突き止めた Blake の墓地の位置を報じてゐる。それによると Blake の葬られた地点は東西の番號七十七番と南北の番號三十二番三十三番の交叉點、今斜の通路になつてゐるところである¹。吾々は連れ立つて其場所へ行つて見た。

そこで散會して一同歸途に就いたが、私は思つた、永く無視忘却

¹ Cf. Herbert Jenkins: *William Blake, Studies of His Life and Personality* (1925), p. 81 ff.

の中に埋れてゐた Blake が歿後百年目に相當する來年を卜して一世の偉人文豪の葬られる Westminster Abbey か St. Paul's かに改めて墓標を建立される榮譽を擔はうとして居る、そして彼が稀世の藝術家、豫言者として世界各地の各種の人々に深甚の感化感銘を與へつつある事實は何をか語る、この事實こそ彼が眞に百年の後に知己を俟つべき、時代を超越せる異常の天才であつたこと及び現實の桎梏を離脱し得ざる現身の人の世の痴愚迷蒙を吾々に教ふるものではなからうかと。

因に Blake Society は 1912 年の創立に係る Blake 愛好者の團體で、重なる事業として Blake 研究に資する目的を以て年次の例會を開き、Blake に関する圖書の出版をしてゐる。現在役員は President: Lord Leconsfield; Vice-Presidents: Sir John Maxwell, Stirling-Maxwell, D.L., Sir John Otter, Professor Caroline Spurgeon, Litt. D., The Poet Laureate (Dr. Robert Bridges, M. A., M. B.), Dr. Greville MacDonald, Mr. H. J. C. Grierson, M. A., Mr. C. Lewis Hind; Secretary: Mr. Thomas Wright, 諸氏であるが、1912 年の report に載つてゐる役員や會員の名簿の中には Edwin J. Ellis, Pierre Berger, Laurence Binyon, A. M. Butterworth, Herbert Jenkins, Geoffrey Keynes, Dr. J. Lawrence [故東大教師], Professor George Leonard, William Muir, Joseph H. Wick-steed 等

の名が見える。そしてこの會の規則と出版物は——

RULES.

1. Object. To draw together admirers of the Poet-Painter William Blake, and to encourage the study of his works.

2. Membership.—A. Ticket, Minimum, Five shillings a year. This will entitle the Member to admittance to the Society's meetings. Life membership: Three guineas. B. Ticket, Twenty-one shillings a year. This entitles the Member, in addition, to a copy of any reproductions of Blake's drawings (either in colour or black and white) that the Society may issue during the year. A number of these have not previously been reproduced.

The List at present is:

April, 1920, to April, 1921.—The Temptation of Christ.

April, 1921, to April, 1922.—Newton.

April, 1922, to April, 1923.—The Nativity.

April, 1923, to April, 1924.—The Soldiers casting Los.

April, 1924, to April, 1925.—Blake's Heads of the Poets.

April, 1925, to April, 1926.—The Characters in Spenser's Faerie Queene.

The reproductions issued in previous years can be obtained.

Price one guinea each.

3. Place of Meeting.—In any town, at any date as may be arranged.

3. Place of Meeting.—In any town, at any date as may be arranged.

PUBLICATIONS.

Blake Society の出版物 Papers read before the Blake Society at the First Annual Meeting, 12th August, 1912 の外に Thomas Wright 出版の *Blake for Babes*, by Thomas Wright (N.D.) 及び *Cowper and Blake* a Paper read at the 13th Annual Meeting of the Cowper Society, held at the Mansion House, London, 23rd April, 1913, by Dr. Hubert J. Norman 等の同會關係の Blake 文献がある。尙 Blake Society の幹事 Wright 氏の address は Cowper School, Olney, near Bedford, England である。

DOCTOR KEYNES に會ふ

1926年八月廿六日の朝であつた。歸國の日も近いたので運送屋を宿に呼んで日本へ送り出す本の荷詰めをしてゐるところへ Binyon 氏から次の様な電報が届いた——

Reply Paid Sangu 4. Cleveland Tee W. 2. Can come tea tomorrow five have asked Keynes. Binyon 翌日は別に engagement がなかつたので取敢ず Thanks coming with pleasure と電報で返事し、別に感謝と承諾の意を叙べた葉書を出したが、それと入れ違

ひに Binyon 氏からも葉書が届いて、同宿の Y 君も誘ひ合せて来る様にと云つて来た。深切な氏は私が面會を希望してゐた Doctor Keynes を私に引合せる機會を作つて呉れたのである。

Dr. Geoffrey Keynes は Cambridgeman で Hampstead の近く St. John's Wood で醫業に従事してゐる傍文學研究者として多年努力を續け、其方面に於ける非凡の才能を發揮し、文壇學界に多大の寄與をして来た人、殊に氏の書史編纂者としての才能と學界に對する貢獻とは何人も之を高く評價することを拒まぬところである。氏は故鷗外博士を思はせる様な文學者で、多忙な醫業の傍着々文學研究の歩を進め、次々に浩翰な著作を公にし、其道の専門家も企て及ばぬ様な精進を示して居るのは、坐ろ驚異畏敬の念を起さしむるに足るものがある。氏の編纂に係る Browne, Donne, 及び Blake の書史は科學者を兼ねた氏の精緻丹念なる研究的良心の好個の發露であつて、將來永く珍重され、學徒文人を裨益することであらうと思ふ。

翌廿七日、指定の時刻より少し遅れて、私は Y 君と一緒に Binyon 氏を自宅に訪れた。Binyon 氏の自宅は British Museum の構内、Entrance に向つて右手に位する、前方に突き出た二階立ちの建築の中程の部分に占めてゐる、Museum 吏員の官舎の一つだ。玄関の近くに止めてある、獨りで操縦して来たらしい輕快な自動車は Keynes 氏のであらう。取次の女中に導かれて階下の廣い應接室に

入ると、先づ Binyon 氏が溫顔に微笑を湛へて吾々の許に進み寄り So glad to see you! と云つて挨拶の手を延べる。次で氏は吾々より

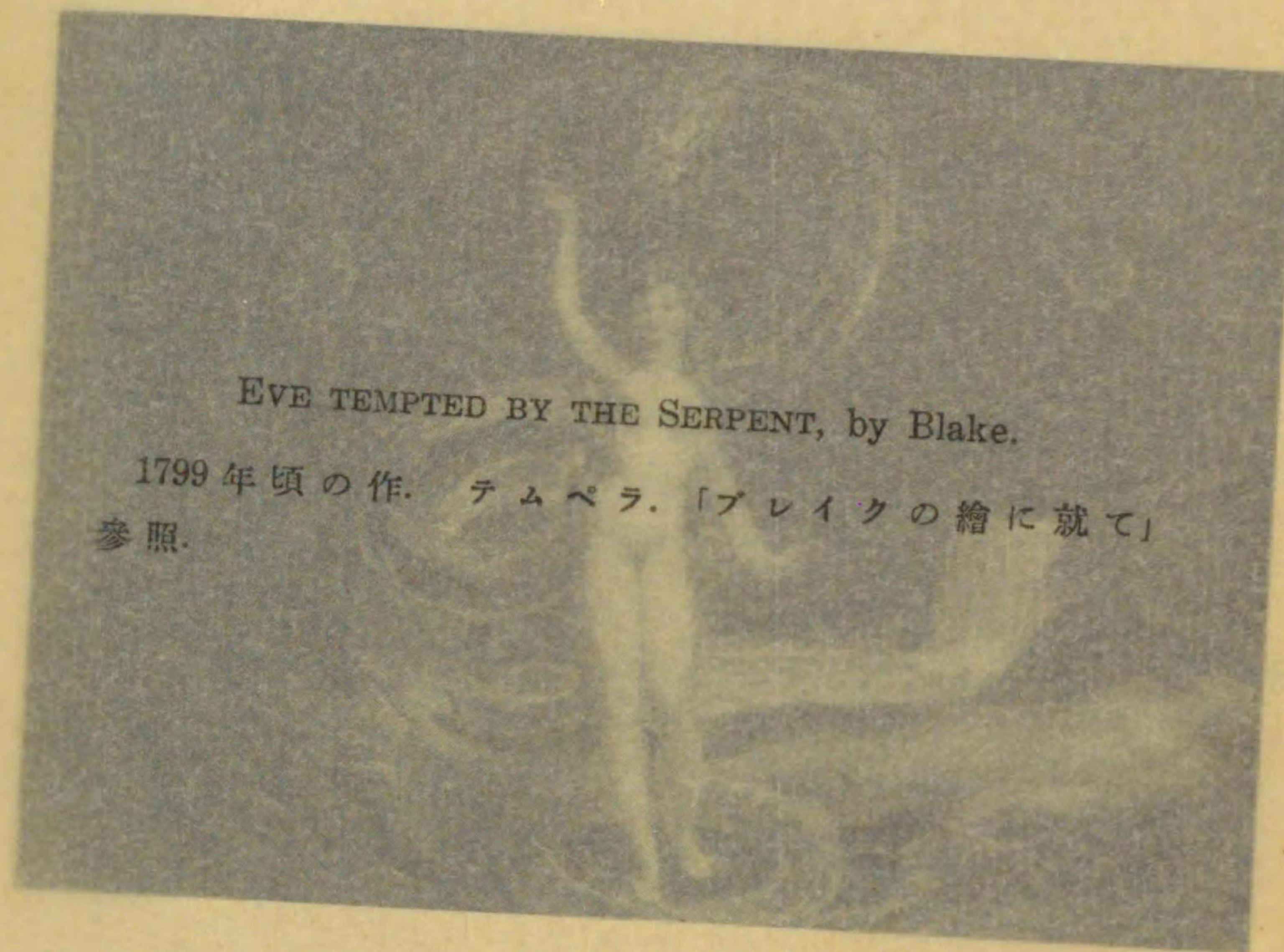
Geoffrey Keynes

Geoffrey Keynes の署名

も前に来てゐた Keynes 氏に、それから氏の夫人や令嬢や母堂に吾々を紹介される。Dr. Keynes は快活で上品な、辯舌の爽

かな、洵に感じのいい中年の美丈夫、最近地方の圖書館から Binyon 氏の許に送つて来たと云ふ、珍らしい *Songs of Innocence* の初版を見てゐた所であつた。挨拶が済むと一同應接室の一隅に用意された卓子を圍んで茶を飲み乍ら雑談を交換する。Binyon 氏は支那美術の愛好者で、茶器なども吳須模様の支那物である。Y 君は専ら Binyon 氏と、私は専ら隣りの夫人及び Keynes 氏と談話を交換する。先づ Keynes 氏は「只今貴方の Blake 詩集を Binyon 君に見せて貰ひましたよ」と云つて話を始める。そこで私は「日本には未だよくよく關係圖書が集つてゐないので Blake を研究することは容易ではありません。私の本の註釋にも此方に来てから誤謬誤解であることに氣付いた箇所があつて恥しく思つてゐるのです」と答へると、Keynes 氏は如才なく、「いや、それは止むを得ません。私も先頃出した Blake 全集に數箇所誤謬のあるのを後になつて發見し

ました」と云つて慰めて呉れる。それから吾々は氏の *A Bibliography of William Blake* や、Damon 氏や、柳氏のことを話した。氏の Blake 書史は 1921 年迄に出版された總ゆる Blake 文献の挿絵入りの記述目録で、大判五百餘頁、Blake 研究者を裨益する所頗る大なる最も重要な Blake 文献の一つであるが、二百部餘りの限定出版で、一般讀者に廣く行き互らなかつたのは遺憾の極みである。British Museum には Keynes 氏の寄贈本が二部あつて、私も度々参照し、便宜を得たが、氏は此著を完成するのに十數年の永い時日を費したと云つてゐた。これは柳氏の「キリアム・ブレイク」は勿論、白樺社主催の「キリアム・ブレイク複製版畫展覽會目録」や、柳氏の「白樺」に書かれた論文まで載つてゐる、洵に行届いた立派な書史で、是非一本を購ひたいと思つたが、特に少部數に限つた亞米利加の出版で——聞けば重な圖書館に寄贈しただけで、Binyon 氏にさへ寄贈出来なかつたと云ふ——竟に手に入れることが出来なかつた。氏は Damon 氏を讃め、Cambridge (Mass.) にゐる氏を是非訪ねて見る様にと云つた。柳氏からは其後さつぱり便りが無いがどうしてゐられるかと尋ねられたので、氏の其後の消息の概略を傳へ、氏が mysticism の line に添うて順次研究の新生面を展開し、目下京都に居を卜し佛教美術の研究に専念してゐられること、先年氏の盡力によつて朝鮮民族美術館が京城に設立されたことなどを話した。



EVE TEMPTED BY THE SERPENT, by Blake.

1799 年頃の作。テムペラ。「ブレイクの繪に就て」参照。

ました」と云つて慰めて呉れる。それから吾々は氏の *A Bibliography of William Blake* や、Damon 氏や、柳氏のことを話した。氏の Blake 書史は 1921 年迄に出版された總ゆる Blake 文献の挿繪入りの記述目録で、大判五百餘頁、Blake 研究者を裨益する所頗る大なる最も重要な Blake 文献の一つであるが、二百部餘りの限定出版で、一般讀者に廣く行き届かなかつたのは遺憾の極みである。British Museum には Keynes 氏の寄贈本が二部あつて私も度々参照し、便宜を得たが、氏は此著を完成するのに十数年の艱辛時日を費したと云つてゐた。これは柳氏の「キリアム・ブレイク」は勿論、白樺社主催の「キリアム・ブレイク複製版画展覧會目録」や、柳氏の「白樺」に書かれた論文まで載つてゐる、洵に行届いた立派な書史で、是非一本を購ひたいと思つたが、特に少部數に限つた亞米利加の出版で——開けば重な圖書館に寄贈しただけで、Binyon 氏にさへ寄贈出来なかつたと云ふ——竟に手に入れることが出来なかつた。氏は Damon 氏を讃め、Cambridge (Mass.) にゐる氏を是非訪ねて見る様にと云つた。柳氏からは其後さつぱり便りが無いがどうしてゐられるかと尋ねられたので、氏の其後の消息の概略を傳へ、氏が mysticism の line に添うて順次研究の新生面を展開し、目下京都に居をトシ佛教美術の研究に専念してゐられること、先年氏の盡力によつて朝鮮民族美術館が京城に設立されたことなどを話した。



かうして約卅分許寛談の後、一同茶の卓子を離れ、男の者だけが氏の書齋に移つて談話を續けた。書齋は細長い北向の部屋で、長い壁の一方に fire-place があり、その近くには日本刀其他支那日本の美術品が色々置いてあつた。その向側のと残りの一方には高い書棚に文學書書美術書が一杯入つてゐた。中に佛蘭西獨逸の Blake 文献も段段あつた。私はそこで初めて Professeur Berger の *William Blake—Mysticisme et Poésie* (1907) を見たのであつた。そこで約三十分寛談の後、吾々は再會を約して兩氏の許を辭去した。

Keynes 氏の Blake に關する著述は次の通りである——

A Bibliography of William Blake. New Nork. 1921. (Limited Edn. of about 250 copies).

On the Morning of Christ's Nativity, Milton's Hymn with Illustrations by William Blake, and a Note by G. K., F. R. C. S. Cambridge. 1923.

The Writings of William Blake, edited in Three Volumes by G. K. London. 1925. (Limited Edn. of 1500 copies).

Letters from William Blake to Thomas Butts, 1800—1803, Printed in Fascimile, with an Introductory Note by G. K. Oxford. 1926. (Limited Edn. of 350 copies).

MAX PLOWMAN 氏と版畫家 HOLLYER 氏

やはり昨年夏、英國を立つ少し前、私は倫敦で今二人の Blakeans に會つた。一人は今春出版された *The Poems and Prophecies of William Blake*, ed. with Introduction (Everyman's Library) の編者 Max Plowman 氏、他の一人は Blake の繪の立派な複製を出した版畫家の Frederick Hollyer 氏である。

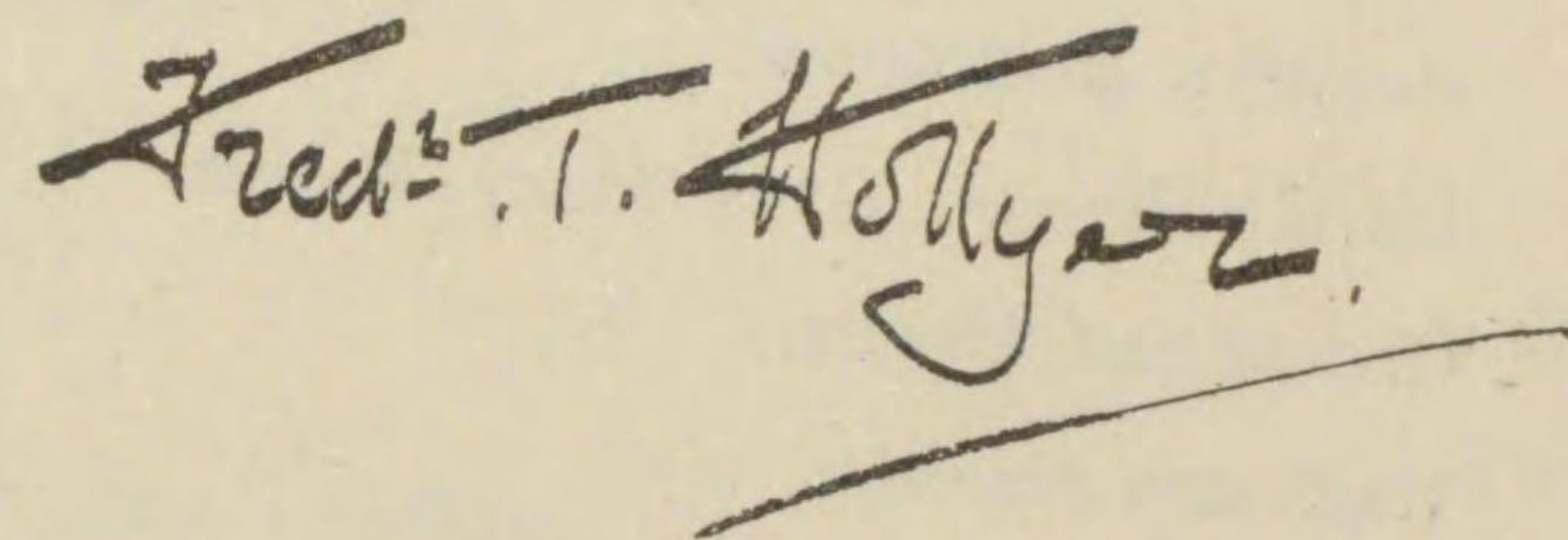
Plowman 氏には British Museum *Max Plowman.* の Department of Prints and Drawings の Students' Room に於て Binyon 氏の紹介で會つた。其時氏は前記 Everyman's Library の Blake 詩集の校正中であつたが、Museum の藏書其他を調べて發見した在來の Blake 詩集の誤謬を指摘し、Blake の詩畫に關する自家の解釋を語つて私の意見を徴された。緩々談合の暇がなかつたけれども、氏も獨逸風の忠實丹念な學者と思はれた。最近氏から贈られた前記の詩集を翻譯したが、text の正確な點に於て推賞に値する好著であり、序文も簡にして要を得てゐる。新にこの普及版が Blake 文献に加へられたことは一般讀書界の慶事と云はねばならぬ。

Frederick Hollyer の精巧な Blake の複製は Blake 愛好者の珍重措かざる所で、私も夙に見もし多少求めもして知つてゐた。倫敦

を立つ少し前小閑を作つて 9, Pembroke Square なる氏の版畫陳列室を訪れた。

玄関の様子、門標の文字の彫刻にも普通の家とは違ふ藝術的な趣が感じられた。Knock に應へて出て來たのは白い仕事着姿の Hollyer 氏其人であつた。

採光の工合のよい
奥の陳列室の壁の
周圍に懸けてある



繪は大部分氏の作

Frederick T. Hollyer の署名

に係る、色刷の Blake の複製であつたが、中に Turner 其他の作家の複製や、彫刻の寫眞なども交つてゐた。氏は日本の柳氏から澤山註文を受けたと云ふこと、氏の版畫の製作は弟と一緒に自ら手を下してやつて居ると云ふこと、製版印刷に手が係り暇が入るので多くは百部位しか作らぬと云ふことを私に語つた。そして最後に氏が Louvres に行つて寫して來たと云ふ、unconventional な、Milo の Venus の大きな寫眞を見せて呉れた。それは撮影の位置、光線の工合共に甚面白い、氏の藝術的天分を示す、立派な寫眞であつた。氏は *Songs of Innocence* や *The Book of Thel* や *For the Sexes*, *The Gates of Paradise* 等の立派な Facsimile Editions を出版した外に Blake の繪の多くの複製を作つてゐる:—

REPRODUCTIONS FROM THE WORKS OF
WILLIAM BLAKE.

I. Platinotypes.

The Procession from Calvary.
 Hervey's Meditations.
 David delivered out of Many Waters.
 Oberon and Titania.
 Ruth and Naomi.
 The Woman with an Issue.
 Sketch: Last Judgement.
 Death on the Pale Horse.
 The Spiritual Form of Nelson guiding Leviathan.
 Satan and the Serpent watching the Endearment of Adam
 and Eve.
 Adam and Eve and the Archangel Raphael.
 The Creation of Eve.
 The Sacrifice of Isaac.
 The Vision of Ezekiel.
 The Woman taken in Adultery.
 The Book of Job (21 designs from engravings).
 Young's Night Thoughts (14 designs from engravings).
 Blair's Grave (12 designs from engravings).

The Canterbury Pilgrims (engraving).

II. Colour-prints.

The Ancient of Days putting a compass to the Earth.
 Satan and the Serpent watching the Endearment of Adam
 and Eve.
 Elijah in the Fiery Chariot.
 The River of Life.
 The Mediator.
 Pity.
 The Vision of Jacob's Ladder.
 Death on the Pale Horse.
 The Temptation of Eve.
 Our Lady, with the Infant Jesus on a Lamb, & St. John.
 The Procession from Calvary.
 6 Designs from the Divine Comedy.
 Plates from the Songs of Innocence: Piping down the
 Valleys Wild, The Lamb, The Black Boy, etc., etc.
 Oberon and Titania.
 Lord, Teach these Souls to Fly.
 Glad Day.
 Plucking the Flower of Joy.
 Design—Book of Thel.
 The Dream of Tiralatha.

ベルジェー教授訪問記

Bordeaux 大學文學部英文學科主任 Pierre Berger 教授は *William Blake, Mysticism et Poésie* (1907) の著者として廣く世界にその名を知られた Blake 學者である。予も教授の著書の英譯を讀み裨補せらるる所尠くなかつたので、佛蘭西滯在中是非面晤を得たいと思つてゐたのであるが、出立間際までつひ其機會を捕へ得なかつた。あと二週間ばかりで佛蘭西を引上げようと云ふ 1926 年の十月上旬になつて予は Bordeaux を見がてら Berger 教授を訪問することにとり決め、巴里大使館の紹介狀を添へ、面會を申込み都合を問ひ合す手紙を Paris の宿から Bordeaux 大學同教授宛に差出した。すると間もなく十月十二日に Berger 教授から次の様な返事が届いた——

Dear Sir,

Your letter, sent on from the University reaches me just now in the country. Perhaps you will have this in time. I am writing, at the same time to the consulate at Bordeaux and send a word for you at the faculté des lettres—I should be very happy indeed to see you. I hope it will be possible.

Pass at the faculté des lettres Wednesday or Thursday or Friday, and there, at the concierge's or at the appariteur's, leave for me your address in Bordeaux. I shall find you.— I shall be at Bordeaux Thursday or Friday, on duty at the faculté des lettres (most probably Thursday 8 to 11.30 a.m.—Friday 2 to 6 p.m.). I am not absolutely sure of the time. I shall leave Bordeaux for the country Saturday morning, but will have plenty of time to talk with you when free Thursday or Friday. I should be very sorry indeed to miss you, and hope, somehow or other, one of my 3 letters will reach you in time.—Very sincerely yours.

Pierre Berger.

山宮様。

大學から廻送の貴翰田舎に於て唯今落掌致しました。多分此の書翰を早晚御受取りのこととせう。小生は同時にポルドーの日本領事館宛に書紙を書き又文學部に貴下への傳言をして置きます。貴下にお會ひするのを誠に嬉しく存じます。お會ひすることが出来るでせう。水曜か木曜か金曜に文學部にお立寄り下され、門衛か使丁にポルドーの貴下の宿所を傳へて置いて下さい。お訪ね致しませう。小生は文學部の用で木曜か金曜にポルドーへ参ります。(多分木曜は午前八時から十一時三十分迄に、金曜は午後二時から六時迄に)。併し時間ははつきり申上げられません。小生は土曜の

朝田舎へ向けボルドーを立ちますが、木曜か金曜に用件が済んだ後貴下と御話しする時間が充分あるでせう。貴下にお會ひ出来なければ誠に残念です。そしてどうかして此の三通の中一通は早晚貴下の御手許に達することを望みます。 敬具。

ピエール・ベルジュー

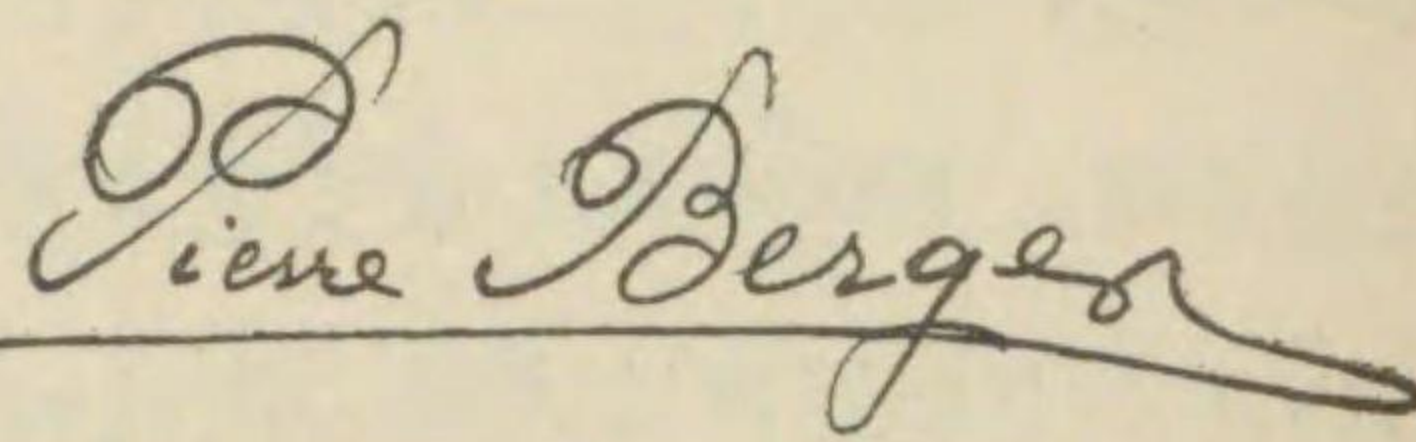
そこで予は早速翌十三日の正午に Gare Quai d'Orsay から汽車に乗り Bordeaux に向つた。偶々翌日 Bordeaux で開かれる社會労働黨の大會に参加する人々と乗合せ、その賑かに話合つてゐる車室の一隅に坐を占めて、車窓に展開する平坦平和な西部佛蘭西の田舎の景色に飽かず眺め入り、書物で読み知つた、今とは違ふ歐洲戦争當時の該地方の擾亂や、悲惨事や、戦後の荒廢やを心の中に想ひ浮かべながら車内に日を過し Bordeaux に着いたのは午後九時五分であつた。汽車から下りて驛を出たが、其日の宿を決めてゐなかつたし、夜でもあつたので、何處か停車場の近くの手軽なホテルに落着く積りで、handbag を片手に下げ、明るい灯のついてゐる宿屋らしい驛前の大きな建物を目懸けて歩つて行くと、同じ汽車で來たらしい二三人の旅客が一足先にその家へ這入つた。後から續いて這入つて見るとそれは窮措大の予に恰度よさうな質素な商人宿で、空室があるとのこと故其處に投泊することにし、一風呂浴びてその夜は早く寢に就いた。

翌朝八時過ぎ宿で déjeuner を済してから此處ではタクシーの代りを務める幌馬車を雇つて Université de Bordeaux へ向つた。低い穢い屋並、凹凸の甚しい、硬い、古風な舗道(石畳)、行交ふ人々や車轢の様子等、Paris から來て見ると如何にも田舎じみてゐる。十五分ばかりで予の馬車は大學の門前に止つた。受付の appariteur に來意を告げると、Berger 教授は唯今留守だと言つて予に教授の置手紙を渡した。それを立つた儘読んでゐるところに Berger 教授は歸つて來られ、不在の言譯をしながら予をいそいそと教授の部屋に案内された。教授の部屋は二十疊位の廣さの、質素な階下の控室風の一室であつたが、教授はその奥の方の窓際に据ゑられたデスクの側の椅子を予に進めて、暫くの間 Bordeaux 大學の様子や、教授の經歷や、Blake 評傳の由來などを予に話して聞かされた。當時教授はまだ秋の學期が始らず休暇中なので、家族同伴田舎に行つて居たが、此の数日大學で行ふ Baccalauréat の試験の用務で Bordeaux に出て來て居るので予の訪問を受けるのに好都合であつたと云ふこと、教授は小學校教師を振出しに累進今日の地位を贏ち得た篤學力行の士であること、教授の Blake 評傳は British Museum に二週間程通つて最後の仕上げをして Paris 大學に提出した教授の博士論文であり、Emile Legouis 教授の審査で通過したものだが、僅か二百部ばかりの限定出版で、今日では稀觀書の一つになつてゐると云ふこ

などを教授の話に依つて知つたのであつた。教授は五十餘の年輩と覺しく、頭腦の明晰な、意志の鞏固な、周到細心な、話上手の學者の様に思はれた。約三十

分會談の後、予は教授の案内で餘り廣くない大學

の構内を巡覽し、教授に伴はれ徒歩で 49 Cours Galliéni の教授の宅に向つた。



Pierre Berger の署名

教授の宅は市内の比較的閑靜な區域にある二階建の獨立家屋であつたが、休暇中は田舎に行つて居るので閉めて置き、時々公用で Bordeaux に出て來る時に開けるだけだと云ふことであつた。當時恰も教授は前の手紙に書いてある通り公務で自宅に歸り、二十歳餘の令嬢に食事其他の世話をさせて大學に通つて居られたのであつた。階上の書齋に通され、令嬢に紹介された。令嬢は Bordeaux 大學英文科に籍を置き、教授の講義を聽いて居る學生で、流暢に、父の教授よりも癖の無い發音で、英語を話した。書齋の卓に倚り余は又教授と暫くの間専ら Blake に關する何くれとない話を交換し、教授の藏書を見せて貰つた。教授は Keynes 博士の *Bibliography* と近刊の *Nonesuch Blake* とを賞揚し、Bordeaux 大學で教授の指導を受けて Blake を研究した卒業生のことや、緬甸の Blake 學者 Manny Ba-Han 氏のことなどを話し、同氏の著書 *William Blake, His*

Mysticism を見せられた。それから教授自身が Blake の全譯を企て、その一部 *Prophetic Books* の佛譯を近く出版する筈であり、又最近の出版にかかる Blake 文献の批評を *Revue Anglo-Américaine* の十月號に寄稿したと云ふことを話された。前者は 1927 年に Paris の Edition Rieder から *Premiers Liores Prophétiques* と題して出版され、後者は上記雜誌の第四年第一號に收められて Paris 大學出版部から刊行された。

約一時間寛談の後階下の食堂に案内され、令嬢の手料理の晝餐の饗應に預つたが、スープ他一皿の、外國人の驚く様な質素な lunch であつた。今もさうであるが當時佛蘭西は歐洲大戰の瘡痕未だ癒えず、財政困難の際とて國民は収入の三分の一乃至二分の一の税金を賦課され、収入は物價の騰貴に伴つて増加せず、中流階級の人士の生活は特に必迫し、氣の毒な状態であつた。予の家庭教師の *Ecole Pratique des Hautes-Etudes* を卒へた Paris の一學者にも屢々生活難の話を開かされてあつたが、Berger 教授も初對面の予に對つて物價騰貴の今日月二千法(當時約我が百二十圓)の俸給で多額の税金を納めなければならぬ佛蘭西の大學教授は高價な英文學の書籍殊に Blake 本などは容易に購求するとは出來ぬと歎聲を漏された時には洵に氣の毒なことだと思つた。それで教授も夫妻と令嬢の三人の小家族ではあつたが、可成廣い家に女中も置かず、よくよく切詰めた

生活をして居られるのであつた。

食後暫く雑談を交換した後午後二時に教授の許を辭し、美術館 (Musée de Peinture et Sculpture) を一覽してから宿の近くの高みにある小公園に引返し、途中の青物屋で買求めた夏蜜柑よりも大きな柘榴を割り、その甘い汁を啜つて南歐氣分を味ひ、眞赤な夕焼の空を映して緩く流れて居る Garonne 河の畔を散歩して六時過ぎに宿に歸つた。同夜七時予は Berger 教授と令嬢とを Hôtel Terminus に招じて晚餐を共にし、再び寛談を楽しみ、翌朝の汽車で友人への土産に買求めた柘榴の籠を携へて Paris へ歸つた。

歸朝後予は教授の著書の寄贈を受け、予も亦予の Blake に関する著述を教授に贈つたが、昭和二年の暮京部で開いた Blake 百年忌記念展覽會の目録を贈つたとき教授は日本に於ける Blake 學の旺盛なのに驚嘆して居る旨を述べた次の手紙を予に寄せられた——

49 Cours Maréchal Gallieni, Bordeaux.
May 11th 1928.

Dear Mr. Sangu,

Many thanks for the catalogue you have been kind enough to send me. It is very interesting and shows how much is known of Blake in Japan—in fact more than one dared hope. All this is very gratifying. I am sure you have had a large share in it and congratulate you about it. I am

trying to do something of the kind in France—but on a much smaller scale. I have translated the short prophetic books and hope soon to publish the translation of Milton, with an attempt at interpretation, and this is no light work. I must own I am often at sea in my explanations, but like everybody else, I do my best. I shall send you a copy when it is published, in a few months, I hope.

Once more my best thanks and kindest regards from my daughter and me.

P. Berger.

親愛なる山宮様、

目録御送附下され有難く御禮申し上げます。それは非常に興味あるものであり、且日本に於て實によく、又實際夢にも思はなかつた程、ブレイクが知られてゐることを示すものであります。是は實に愉快なことです、きつと貴下が該展覽會に大いに盡力されたことと思ひます、そしてそれを御喜び申します。小生も佛蘭西でさうしたことをやつて見ようと思つて居りますが、非常に小規模のものです。小生は小豫言書を翻譯しました。ミルトンの翻譯を解説付ですぐ出版したいと思ひますが、是は容易な仕事ではありません。實際小生は説明を書く時途方に暮れることが屢々です。けれども誰にも劣らず全力を盡して居ります。數個月後に

出版されることと思ひますが、出版されたら一部御送り致しませう。

繰返し厚く御禮申上げます。尙娘よりも宜しくと申し出ました。

敬具

ピー・ベルジュー

— 昭和四年八月 —

日本ブレイク學回顧

I

予の敬愛する英國の Blake 學者 Laurence Binyon 氏は最近予に寄せた私信の中で “I am sure that Blake is rejoicing that his fame and his writings spread so far, and that there is so much interest in his work in Japan.” 『ブレイクは彼の名聲及び彼の作物が隔遠の地にまで擴つたことを、又彼の作物に對する興味の日本に熾であることを喜んでゐるに違ひないと思ふ。』と云つてゐる。Blake の如き精神的作家が吾々日本人に喜ばれるのは元より謂れの無いことではないが、永い間同國人に狂者として取扱はれ、一般人士に理解されなかつた彼が、今別種異文の國民の間に同國人に劣らぬ熱意を以て驩迎せられ、研究されてゐる現状は、洵に今日の歐米人士のみならず地下なる Blake の靈をも驚異せしめてゐることであらうと思はれる。予は今予の蒐集し、探知し得た材料に據つて今日に至るまでの日本に於ける Blake cult 乃至 Blake の影響を跡づけ、同好學の士の參考に供しようと思ふ。唯文中敢て禮に倣はざる自己業蹟の供述を差控へないのは一に本文を能ふ限り客觀的價值あるものとし、讀者の不便手数を鮮なからしめんとの意圖に出づるものなることを諒解せられたい。

II

Blake を初て日本に傳へた文献は恐らく明治 27 年 (1894) 博文館刊行の大和田建樹輯譯「歐米名家詩集」であらう。この本は英米獨佛諸國詩人の短詩の邦譯に作家の小傳を添へた、四六判紙裝上中下 3 卷より成る譯詩集で、恐らく歐米の編者の手に或る孰れかの anthology の抄譯であらうと思ふ。Blake の作はその上卷に『ウキリアム、ブレイク氏は千七百五十七年龍動に生れ千八百二十七年に死す。年七十。繪と詩との名人として世に知られたり。』と云ふ小傳と共に唯一つ *The Echoing Green*¹ の譯『反響の野』を掲げてゐる——

其 一

日は出でぬ
幸ひ空に影満ちぬ
春を迎ふる鐘の音(ね)は
たのしき聲をおくるなり
うれしき調べ打ちそへて
鳥こそ歌へ喜びを
つたふる鐘ともろともに
我等が遊びは今ぞ時
反響(ねが)こたふる野邊にいざ

¹ Cf. *Songs of Innocence*.

其 二

をちかたの
櫛の木陰に座をしめて
こなた見おこす老人は
我らが遊びを笑ひつゝ
みなこゑごゑに語るなり
われも昔はあの如く
こだま答ふる野に出で
見られし時もありつるを
よろこび胸に満ちたるを

其 三

たのしみも
見すつるまでに疲れたり
日ははや山に傾きぬ
今日の遊びもこれまでぞ
ねぐらに急ぐ鳥ならで
母の家にと急ぎゆく
姉よいとよ兄弟よ
反響(ねが)こたへし野邊ははや
ひとり淋しく残されぬ

これは各齣の第一行を除き總て當時流行の安易單調なる七五音節の詩形に大意を器械的にたどたどしく寫したに止り、原作に横溢躍動してゐる快活な氣分や明朗暢達な音律の美やはこの譯詩には全然現はれて居らぬ。併しながら英語英文學がまだ専門的に深く研究され鑑賞さるるに至らなかつたこの啓蒙時代の「英學者」の譯業に多きを求むるは無理であらう。

亞で翌明治 28 年 (1895) 5 月發行「帝國文學」第 1 卷第 5 號 (108-113 頁) の「故ペイタアの遺稿」中に Blake への言及がある。本文は無記名であるが、故上田敏博士の筆に成り、明治 34 年 (1901) 春陽堂發行の同博士の「文藝論集」(321-330 頁) に「ヲルタア・ペイタア」と改題再録された *Greek Studies* の紹介文である。文中 Blake への言及は『酒の神、葡萄の精、ディオニソスを説きたる篇は行文一際秀麗にして規矩拘束の外に脱出し、奔流の自然にして當る可らざる勢あり。婉曲縹渺の調よく此神の優遊奔放、暫くも靜らざるに適す。ペイタアは此神を名けて「火と露とより再び生れたる葡萄の樹の精神的形體なり」といふ。蓋し此精神的形體といふ文字は近英の神秘家にして詩人と畫工とを兼ねるブレイク William Blake (一七五七——一八二七) の成語にして、内外界の勢力人心に印象を寫し、是に於て一種人間に類似したる形體を取りしものをいふ』てふ個所である。さうしてこれは「恐らく *Greek Studies* の

初章」, *A Study of Dionysus* 「に見える Pater の言葉に」據憑するものであらうと云ふ壽岳氏の「臆測」¹ を予は文献學的に支持し得るものと思ふ。

之に亞ぐ吾邦の舊い Blake 文献は明治 34 年 (1901) 東京専門學校出版部刊行の坪内雄藏博士の「英文學史」² 及び明治 35 年 (1902) の同書の再版で、初版は 607-8 頁に再版は 613-4 頁に Blake に関する簡単な記述があるが、これは明治 40 年 (1907) 大日本圖書株式會社出版の淺野和三郎氏の「英文學史」(425, 426 頁) 並に同年帝國百科全書の一冊として博文館から出版された栗原基、藤澤周次兩氏の「英國文學史」(225, 226 頁) の叙説同様常套一遍の不十分な記事であるが、英米の文學史にすら Blake の名を逸してゐるもの尠くなかつた當時のこと故また止むを得ない次第である。

續いて明治 37 年 (1904) に内外出版協會から刊行された「對譯英米名家詩抄第一集『薄もみち』」に編者小野竹三氏の *To the Evening Star* の譯「夕づつに」が原詩と對照で掲載されて居り、翌明治 38 年 (1905) 發行の同書第二集「三人の歌女」に編者若月紫蘭氏の *Reeds of Innocence (Introduction to Songs of Innocence)* の譯

¹ 壽岳文章編「キルヤム ブレイク書誌」671, 672, 頁參照。

² 本書と殆ど同一内容のものが明治 34 年以前に講義録として東京専門學校出版部から刊行されてゐる。

「罪の蘆」がやはり對譯の形式で掲げられ、續いて明治 39 年 (1906) に發行された同書第三集『虹のかげ』にも編者小原要逸氏の同じ詩の譯が「無心の蘆」と題し原作と共に登載されてゐる。是等諸氏は英文學專攻の士であり、その譯業も大和田氏のそれに比し一段の進境を示してゐるが、孰れも特に Blake を研究して居られた様子はなく、自然譯が器械的で原作の風趣をよく再現し得ざる憾無きを得ない。次に掲げるのは小原氏の *Introduction to Songs of Innocence*¹ の譯である——

無心の蘆

ウキリアム、ブレイク

心のどけく笛吹いて
ひとり峽(峽)をくだりしに、
見れば雲間に童あり、
ゑみつゝわれに謂ひけらく。——

『羊をまもる曲(2)吹けな。』
われ、喜びて吹き了へぬ
『君、その歌をまた吹けな。』
吹けば聴きつゝ泣けるかな。

¹ *Songs of Innocence.*

『置けよ、たのしき汝が笛を。
たのしき歌を歌ひてよ。』
われ、また歌を歌へるに
聴いてうれしと泣けるかな。

『あゝ、世の人の讀まんため、
君よ、すはりて書きつけよ』
見れば童は消え去りつ、
うつろの蘆をわれ摘みつ。

かりのすさびの筆としつ、
清き水をばにごらしつ、
たのしき歌を書きつけぬ、
童や開きてよろこばむ。

次に明治 40 年 (1907) に夏目漱石氏の「文學論」が春陽堂から出たが、その 288 頁から 293 頁に亘つて *The Crystal Cabinet* に加へた Swinburne の解説¹ を譯出し、之を批評した條がある。その批評は Swinburne の支持せんとする象徴的手法を非とする氏の一家見を叙べたもの、理知的な氏の文學觀の表白として興味がある。

¹ Cf. A.C. Swinburne: *William Blake, a Critical Essay* (1861).

是より先明治 36 年 (1903) 白鳩社発行の詩集「獨絃哀歌」に著者蒲原有明氏の *Ah, Sunflower* の譯「ああ日ぐるまや」が發表され、續いて明治 41 年 (1908) 易風社から刊行された「有明集」にやはり著者蒲原氏の *The Fly* の邦譯「蠅」が前著同様氏の創作詩篇と共に掲載されてゐる。蒲原氏は、人の知る如く、夙に Blake 及び Rossetti の詩風に心を傾け、吾邦の詩壇に象徴主義を移入した先覺の一人であるが、氏の Blake の譯は在來のどの譯よりも洗鍊され、渾然たる藝術品の姿體を具へてゐたのは、氏の詞才と同感味解の徹底の然らしむる所であると思はれる。寔に氏に依つて初て Blake の面影を髣髴せしむるに足る譯詩が日本に出來たと云つていい。是等は孰れも最初雑誌に發表され、「蠅」は當時眞山青果氏が自作の小説に引用された由であるが、遺憾ながら本文起艸前に其等雑誌及び小説の題名や發行年月を確めることが出來なかつた。この中 *Ah, Sunflower* の譯は大正 11 年 (1922) アルス刊行の「有明詩集」に「常世鈔」と改題再録された。蒲原氏の *The Fly* の譯は――

蠅

さ蠅(は)よ、あはれ、
わがころなき手(て)もて、今(ま)に
汝(は)が夏の戯(あそ)びを
うるさきものに打拂(は)ふ。

あらぬか、われや
汝(は)に似たるさ蠅(は)の身(み)、
あらぬか、汝(は)、さらばまた
われにも似(に)たる人(ひと)のさま。

われも舞(ま)ひ、飲(の)み、
かつは歌(うた)へども、終(は)つた日(ひ)や、
差別(さ)れをおかぬ闇(やみ)の手(て)の
うち拂(は)ふらむ、わが翼(は)。

思(おも)ひわかつぞ
げにも命(いのち)なる、力(ちから)なる、
思(おも)ひなきこそ文目(ふみ)なき
死(し)にはあるなれ、かくもあらば、

さらばわが身(み)は
世(よ)にも幸(さい)あるさ蠅(は)かな、
生(い)くといひ、將(は)た死(し)ぬといふ、
その歎(なげ)れともあらばあれ。

後に生田春月氏が越山堂から出された「泰西名詩名譯集」(大正 8 年, 1929) にも蒲原氏の同じ詩の譯が「蒼蠅の歌」といふ題名の下

に収録されてゐるが、上掲「有明集」の譯とは可成相違して居る。恐らく譯詞の比較的不整な點から見て生田氏の譯詩集に採録の分は「有明集」以前に雑誌に掲載された分に據るものであり、「有明集」登掲の分は推敲を経た後日の改譯であらうと思ふ。

蒲原氏の譯が發表された後間もなく生田長江氏が *The Sick Rose* の譯を、たそがれ生が *The Wild Flower's Song* の譯を夫々「病める薔薇」及び「野花の歌」と題して當時の文學雑誌（「文庫」，「藝苑」，「明星」，「新潮」の孰れか）に發表されたが、予は竟にその雑誌の名や發行年月を確めることを得なかつたのは遺憾である。現廣島女學校専門部教授辻村鑑氏も當時たそがれ生の雅號を用ひて作物を發表して居られた詩人であるが、Blake の譯者のたそがれ生は氏とは別人の由である。上記生田春月氏の「泰西名詩名譯集」から生田長江氏及びたそがれ生の譯詩を次に引用してその譯風を示さう——

病める薔薇

花薔薇(はなびらぎ), はなさうび,
汝(き)は病めり。飛ぶかけの
見もわかぬ夜の蟲の,
風さゆる闇にして

深紅(く)なる歡樂(はら)の
汝(き)が床を見出でたり。
そのくらく密なる戀に
戀にしも汝(き)は死なむ。

野花の歌

緑の木の葉しげりたる
森の木(こ)の間をもとほりて,
われし聞ぬれ、なつかしき
野花の歌の一ふしを。

「ものしづかなるこの夜を
身は地(ち)の上(う)にうまいしつ、
花のおもひをつぶやきて
胸におぼえぬ、よろこびを。

咲き出(い)る朝のうばらなす
ああ曙(あけぼの)や、あたらしき
快樂(はら)にわれはあこがれて、
めぐりあひけり、「あざけり」に。

是等二篇の譯詩も初期の翻譯に比べて遙に洗練されて居り、原作の味解の點に於て幾段の進歩を示してゐることは皆人の認むる所であらう。恰度この頃尖鋭なる感覺と目新しい象徴的流風とに依つて世人の視聽を聳てつあつた詩壇の新人三木露風氏は明かに Blake の影響と覺しき「病める薔薇」と題する抒情詩を確か「趣味」誌上に發表された——

いつよりか、あはれ薔薇よ、
傷つきて汝(君)は悲しむ。
惡の蟲、樹より傳ひて、
我が花はおそれに戰(闘)ふ。
あゝ花よ、戀の薔薇よ、
若くして汝は病みたり。

この詩は後に「癡園」,「露風集」等に再録され、又山田耕作氏の譜曲も出來て廣く世人に知られるやうになつた。嘗て作者は予に向つて此詩は「ブレイクに心酔してゐた頃の恥しい模倣の作」であると卑下して語られたことがあるが、予は之を Blake の作同様立派な作品として高く評價する。ここには Blake の「薔薇」の凄味と衝迫力の代りに優雅綢繆たる情緒の微妙な表現がある。

次に明治 41 年 (1908) 宮森桃潭(麻太郎)小林潜龍兩氏が三省堂か

ら出版された譯註「英米百家詩選 (282-285 頁) に Blake の *The Tiger* が紹介された。續いて明治 44 年 (1911) には帝國文學第 17 卷第 2 號の卷頭論文として和辻哲郎氏の「象徴主義の先驅者キリアム・ブレイク」の一文が現れた。これは筆者の辭つて居られる通り James Huneker 及び Yeats の所説に據つて叙べられたブレイク論であるが、恐らく吾邦最初の Blake に関する評論であり、明治時代最後の Blake 文献である。

大正に入つて最初の二年間は吾邦 Blake 文献に何等加ふる所なかつたが、大正 3 年以後には注意すべき文献が續々と現れた。その最初のものは大正 3 年の「白樺」4 月號で、それには柳宗悦氏の「キリアム・ブレイク」及び Bernard Leach 氏の *Notes on William Blake* の二つの文章が 19 面の挿繪と共に掲げられた。Bernard Leach 氏は是より先大正 2 年 (1913) 1 月の白樺の表紙に Blake の *The Tiger* の詩句を配せる同じ詩に因んだ圖案を描き、又 Blake の詩に因んだ圖案を配した藝術的な陶器を度々作つた異色ある英國の etcher であるが、吾邦最初のブレイク學者柳氏を Blake の藝術に導き、やがて熾なる Blake 研究の機運を吾邦に醗酵せしめたのは實に Leach 氏其人であつた。この意味に於て Leach 氏は柳氏と共に吾邦 Blake 學徒乃至一般英文學研究者に永く記憶さるべき人である。

同年4月には「現代詩文」に服部嘉香氏の *The Little Boy Lost* (*Songs of Innocence*) の譯「迷へる兒」が現れ、續いて同誌7月號に同氏の *Nurse's Song* (*Songs of Innocence*), *The Sick Rose*, *The Fly*, *Ah! Sun-Flower* の譯が夫々「保姆の歌」、「病める薔薇」、「蠅」、「あゝ、向日葵」と題して發表された。これは上記服部氏の *The Little Boy Lost* の譯である——

「父よ、父よ、いづこにか行きたも〔原〕ふ?

ああ、しかく速に歩みたまふな!

語りたまへ、父よ、汝が幼兒(兒)に語りたまへ。

さなくば、われ失はれむ。

夜は暗く、父はあらず。

兒は露に濡れぬたり。

泥は深く、兒はひた泣く。

靄はたゞ流れ流れて。

一方柳宗悦氏は「白樺」5月號に「肯定の二詩人」と題する一文を掲げ、再び Blake を Whitman と對比して論評されたが、これは上掲「白樺」4月號の「キリヤム・ブレイク」の補遺として書かれた文章であつた。更に柳氏は Blake の箴言風の感想語録の選譯に解説を施し「ブレイクの言葉」と題して同年7月の「白樺」に發表された。

續いて同年9月には故櫻井鷗村(彦一郎)氏の「英詩評釋」が丁未出版社から出、その中に Blake の小傳と共に *To Autumn*, *To Morning*, *Song* (Fresh from the dewy hill), 及び *The Tiger* の註釋が掲げられたが、同年12月には吾邦の Blake 文献中最も重要なものの一つ、柳宗悦氏の「キリヤム・ブレイク」が洛陽堂から刊行された。

この本は菊判 802 頁、挿畫 62 葉、重厚高雅な布装の大冊で、Leach 氏へ献じたもの、本文を 22 章に別つて詩人及び畫家としての Blake の全約を柳氏一流の熱意の籠つた文章で描き出してゐる。Blake は柳氏が mysticism 研究の途上に於て捕へた題目の一つであるが、吾邦斯學の先達としての氏が本書を完成するに就て拂はれた努力と苦心とは實に鮮少でなかつたらうと察せられる。本書は全卷 Blake に對する篤い渴仰の心で書かれた彼の生涯、思想及び作物の讚美で、學的な客觀的批判に缺くる處はあるが、吾邦の作家や學徒を刺戟啓發する所尠くなかつた、銘記すべき著作である。「キリヤム・ブレイク書誌」の壽岳文章氏の云はるる通り、吾邦に於ける Blake 研究は本書に始ると云つていい。さうして本書は「若き著者が」¹「ひたすらにブレイクの心をさぐり、その心を心として、彼の思想と藝

¹ 壽岳文章編「キリヤム・ブレイク書誌」, 372 頁参照。

術と生涯とを、愛と理解とにみちたる筆で表現した」¹もので、「参考書の蒐集にさへ多大の不便が伴つたであらう當時に、若き著者によつてかゝる立派な著作が成された事は、世界に於けるブレイク文献史に特筆せらるべき驚異であらねばならぬ。」² 本書は今絶版となり、古書市場に於て發行當時の賣價の六七倍の高値を稱へてゐる。

是より先大正3年(1914)2月乃至9月の更予は同窓の友人豊島與志雄、山本有三、土屋文明、芥川龍之介、久米正雄、成瀬正一、菊池寛、松岡讓等諸氏と第三次「新思潮」を刊行したが、その創刊號の表紙に Blake の繪 (Space) の複製を掲げ、7月號に Yeats 纂輯の「詩神文庫」Blake 集から Blake の散文の若干を撰んで翻譯し「ブレイクの言葉」と題して登載したが、一方三木露風、川路柳虹、服部嘉香、柳澤健、西條八十、増野三郎、新城和一、山田耕作、齋藤佳三の諸氏及び予を同人とする季刊詩誌「未來」第1輯(2月)に「ウイリアム・ブレイクと想像」(イエーツ)を、同誌第2輯(6月)に「ウイリアム・ブレイクと彼の神曲の挿畫」(イエーツ)及び「ブレイクの詩集より」と題して *Spring, Laughing Song, The Cloud and the Pebble, The Tiger, Divine Image, The Sick Rose*, 及び *Auguries of Innocence* の最初の四行の譯稿を掲げた。

^{1 2} 壽岳文章編「キルヤム ブレイク書誌」, 372 頁参照。

是等の翻譯は今日之を顧て甚だ未熟な氣恥しく思ふものが多いが、trochaic tetrametre の *The Tiger* は Dr. Julius の故知に倣ひ各行4音節よりなる邦語に移し邦譯をば形式の方面からも原作に接近せしめやうと苦心したことを想ひ出す。當時予は東京帝國大學の學生であつたが、Yeats の著作を通じて Blake を知り、彼に興味を覺えて大正2年頃先輩の土居光知氏、同窓の矢代幸雄氏等同士の人々(他に或は齋藤勇、井手義行等の諸氏も居られたかも知れぬ)と共に故 Laurence 先生指導の下に毎週一回研究室で Blake を讀んでゐたが、當時大學の圖書館にも吾々の手許にも Blake の参考書は殆どなく、全く暗夜の道を辿るにも似たる思ひで「詩神文庫」Blake 集を通覽したこと、1912年に倫敦に創立された Blake 協會の會員であつた博覽強記の Lawrence 先生に故事出典を説明して頂き、大學卒業後當時迄通學勉強を續け、Swinburne の Blake 評傳も讀んで居られた土居氏に毎度有益な暗示を與へられて裨益する所鮮くなかつた様に記憶する。此頃京都に於ても石川速水、矢野峰人、岡本春彦等學生諸氏が Blake の作に親しみ、矢野峰人氏は夙に大正2年の暮頃に三高嶽水會雜誌に Blake の譯詩を掲げ、大正3年7月以後の短歌雜誌「水甕」に屢々 Blake の詩及び Symons: *William Blake* の翻譯を寄せられ、現在巴里に居る版畫家長谷川潔氏も大正4年(1915)一月の「水甕」第2卷第1號の表紙を Blake の *The Little*

Black Boy の design で飾られた。かくして大正 2 年 及び 3 年は柳氏の大著が出版されたのみならず、期せずして各所に Blake 研究の機運が動き始めた、吾邦 Blake 研究の歴史上銘記すべき年であつた。

超えて大正 4 年には雑誌「文明評論」第 2 卷第 3 號(3 月)に齋藤勇氏の「忌憚なき感謝 ウィリアム・ブレイクを論ず」(214-221 頁)が同氏が柳氏の「キリアム・ブレイク」を批評した文章(275-277 頁)と共に掲げられた。前者は基督者並に英文學者としての筆者が Blake の無邪氣乃至直情徑行を讃へたもの、後者は柳氏の Blake 評傳の忌憚なき批評で、齋藤氏は柳氏の著書の長所も短所も共にその隨所に躍如としてゐる「熱烈な同情」「渴仰の精神」にあると云つてゐる。この批評に對する柳氏の答辯が同じ「文明評論」の第 2 卷第 5 號(5 月)に齋藤氏の辯駁文と共に掲げられたが、兩氏の見解の相違は要するに夫々得失のある主觀的及び客觀的態度の相違で、柳氏の宗情的情熱にも齋藤氏の學的客觀性を尊重する心にも共に理由があり意義もあると事分けて云ふより他はあるまい。

同じ大正 4 年(1915)2 月には今は無くなつた日比谷美術館に「白樺」主催第七回美術展覽會が開催せられ、Blake の繪の複製が幾つか、出陳されたが、その折の目録には Blake の生面の寫眞と Blake の略傳とが掲げられた。「白樺」社は更に大正 8 年(1919)神田流逸莊及び京都帝大基督教青年會館に「キリアム・ブレイク複製版畫

展覽會」を開いて Blake の繪を展觀に供し、降つて昭和 2 年(1927)異常なる活動家幡谷正雄氏主催の Blake 展覽會が東京、福岡、新潟等で催され、柳宗悦、壽岳文章及び予の三人は同好諸氏の協力を得て京都恩賜博物館に Blake の繪や文献の展覽會(12 月 10 日乃至 16 日)並に講演會を開いて Blake 百年忌を紀念したのであるが、是等の催は年を逐うて多きを加ふる關係文献と相倚り相扶けて吾邦に於ける Blake 研究の熱意を盛ならしめ、最近に至る迄に出版された吾邦の Blake 文献は本文末尾の目録によつて知らるる通り夥しき多數に上り専載本 9 點、雜載本 93 點、定期刊行物 210 點、展覽會目録 4 點、總計 316 點他調査未了の定期刊行物數點を算するに至つた。その中大正 4 年 1 月以後の出版に係るもの大多數を占め 287 點であるが、是等輒近の文献は比較的よく知られてゐると思はれるからその一々に就き縷説することを控へ、専載本のみ就て叙べることにする。

大正 4 年以後の出版に係る文献中注意すべきものに大正 10 年(1921)叢文閣刊行柳宗悦氏の「ブレイクの言葉」がある。これはボール紙装四六倍判金文字金模様入の装釘で、Blake の「手紙及び散文よりの拔萃」(翻譯)103 頁を本文とし、Blake の生面の寫眞のほか、Blake の繪の代表的なもの 43 種を擇み、之を 36 面の網目版に仕立て解説を添へて配せるもの、Blake の思想藝術を知らんとす

る日本の讀者にとつて有益便利な著作である。本書は表紙に Blake の The Man Sweeping the Interpreter's Parlour の複製を金で押し、その上にやはり金で THE SAYINGS OF WILLIAM BLAKE SELECTED FROM HIS LETTERS AND PROSE WRITINGS TRANSLATED AND ANNOTATED BY MUNEYOSHI YANAGI といふ英文の標題を押し背を白の局紙で包んだ高雅な装釘である。

「ブレイクの言葉」の次に現れた Blake 専載本は大正 11 年 (1922) アルス刊行の予の「ブレイク選集」(アルス泰西名詩選 5) で、これは *Poetical Sketches*, *Songs of Innocence*, *Songs of Experience*, *Rossetti MS.*, *Pickering MS.*, *The Marriage of Heaven and Hell*, *Milton*, *Prose Writings* よりの Blake の詩文の選譯に「ブレイクの思想」と題する一文、解説、フィリップス作 Blake 畫像及び Blake の繪の複製都合 6 面を挿畫として添へた布裝四六半裁判 267 頁の小本である。之に亞ぎ翌大正 12 年 (1923) に聚英閣から渡邊正知氏の「ブレイク詩集」(泰西詩人叢書第六編)が出た。これはやはりボール紙裝菊半裁判 201 頁の小冊で、*Poetical Sketches*, *Songs of Innocence*, *Songs of Experience* 及び *Rossetti MS.* 中の詩 72 篇の邦譯であるが、忌憚なく所見を述べるとその大多數が前年出版の予の「ブレイク選集」の譯の改悪と思はれるのは遺憾である。續いて大正 14 年 (1925) に予の *Select Poems of William Blake* が

英文學叢書的一篇として研究社から出た。これは四六判布裝 417 頁に Blake コロタイプ印刷肖像他原色版及び網目版の Blake の繪の複製 7 面を挿畫として配したもので、内容は Introduction (XLVII pp.), Text (150 pp.), Notes (185 pp.), Index to Notes (24 pp.), Index of Titles (4 pp.), Index of First Lines (6 pp.) より成つてゐる。之に次ぐ専載本は大正 15 年 (1926) 文英堂刊行尾關岩二氏譯「ブレイク詩集」(世界名詩選 11) である。これもボール紙裝四六半裁判 134 頁の零細な冊子で、フィリップス作 Blake 像他一個の網目版を添へた *Poetical Sketches*, *Songs of Innocence*, *Songs of Experience* 及び *Rossetti MS.* からの 48 篇の詩の邦譯であるが、渡邊氏の譯書同様譯詩の大部分が既刊「翻譯の拙劣なる翻譯」であり、洵に存在價值なき影の薄い文献であると云はざるを得ない。次に昭和 2 年 (1927) Blake 百年忌を紀念する出版と稱して幡谷正雄氏の評傳「ウィリアム・ブレイク」が新生堂から刊行された。四六判布裝 355 頁の本文に 16 面の網目版の挿畫を添へたもので、本文内容は幼時及び徒弟時代、結婚生活、創作時代、初期の豫言詩、ラムベス時代、フェルファム[原]時代、二大豫言書、悲憤の日、暗黒の日、輝く晩年、永劫の國へ、ブレイクの思想、ブレイクの先覺、ブレイクの影響、ブレイクの文献、ブレイクの使命、ブレイク年譜、ブレイク参考書の諸項に別たれて居る。幡谷氏は同年續いて四六判

布装 309 頁網目版挿畫 3 葉添付の「ブレイク詩集」を新潮社から出版した。幡谷氏が Blake の詩を日本に紹介し、百年忌を賑はされた勞は多とすべきであるが、既に壽岳氏や榎垣實氏の指摘された通り、氏の翻譯も柳氏や、壽岳氏や予の曩に發表せる翻譯の改悪と思はるる箇所餘りに多く、然らざる場合も原作の理解の不徹底を曝露し、措辭の洗鍊を缺くもの多きは遺憾である。

降つて本年 (1929) 4 月吾邦 Blake 學の歴史に特筆せらるべき貴重な文献が現れた。それは神戸ぐろりあ そさえての出版に係る壽岳文章氏の「キルヤム ブレイク書誌」である。本書は既出柳宗悅氏の「キリアム・ブレイク」と共に是迄日本に現れた専載 Blake 文献中最も價值ある勞作であり、Blake 學徒を裨益する所鮮少なからざる好著であるが、予は先づ本書に現れてゐる編者の細心周到の用意及び丹念克明なる研究的態度に對し座る畏敬の念の湧き起るのを禁め得ない。而して予は本書を Blake 百年忌を卜して出版しようとした最初の計畫を棄て、爾後更に一年有半の歳月を借して本書をいやが上にも完全なものとして世に問はれた編者の非ジャーナリスチックな態度に對つて敬意を表すると共に、この利殖に縁遠き純學究的著作を善美を盡せる驚異すべき書冊に仕立てて一般愛書家及び好學の士に提供された出版書肆ぐろりあ・そさえての意圖を多とし、斯學に携る一人として同書肆の代表者伊藤長藏氏に感謝を捧ぐる義務ある

を思ふものである。本書は四六倍判アンカット手織絹(特製)又は羊皮及び紺紙(並製)金飾の裝釘、紙數 757 頁、挿畫 113 面の多きに上る大著で、底本として利用せる Keynes 博士の Blake 書誌 (1921) に收載の Blake 文献を全部網羅し、其上に其後の出版に係る世界各國の Blake 文献を殆ど漏れなく收録せる、文献學的に正確な記述目録であり、嘗に日本のみならず全世界の Blake 學徒に裨益を與へ感謝さるべき好著である。唯本書は Keynes 博士の書誌同様僅か 200 部の高價な限定出版で廣く好學の士に行き互らなかつたのは、斯種の出版物として止むを得ないことではあるが、遺憾の至であると云はねばならぬ。次に掲ぐる内容目次を見るも本書の價值の一斑は察し得られるであらう——

〔前付〕 献詞—序文—例言—略語表—内容目次—挿畫目次—ブレイク年譜。

〔本文〕 〔第一部、ブレイク自身の作品〕—解題—稿本—傍註—書牘—活字本—彩飾本—線彫—所在不明のもの—〔第二部、挿畫〕—解題—下繪、彫版共にブレイクの作—下繪はブレイク、彫版は別人の作—下繪は別人、彫版はブレイクの作—〔第三部、版本ブレイク作品〕—解題—翻刻本—複製本—樂譜—〔第四部、評傳、翻譯、註釋、其他〕—解題—單行本(専載本、雜載本)—定期刊行物—目録(展覽會目録、賣立目録)—後記—日本に於けるブレイク研究の歴

史=追補, 正誤=索引.

以上現存日本 Blake 文献中大正 3 年以前の出版に係るもの、及び爾後最近に至る迄に刊行された専載本に就き略述したが、大正 4 年以後諸種の定期刊行物及び雑載本に現れた Blake 文献中に注意すべきものが尠くない。就中土居光知、佐藤清、壽岳文章、齋藤勇、佐藤顯彰、竹友藻風、井上思外雄、榎垣實、日夏耿之介、矢野峰人諸氏の論文や鑑賞や翻譯や註釋が最も重要なものであるが、尙此他に高安月郊、富田碎花、吉田絃二郎、岡倉由三郎、福原麟太郎、山本智洞、中西悟堂、濱林生之助、左右田實、河原宏、下榮晚、旭正秀、大槻憲二、湯山清、伊津野直、生田光太郎、工藤直太郎、中川孝、岡田幸一、雜賀忠義、百瀬清志、宮崎安右衛門、花園兼定、市河三喜、中村爲治、Edmund Blunden、伊東勇太郎、繁野天來、西條八十、横山有策、正富汪洋、小日向定次郎諸氏及び予の手に成る論文、翻譯、註釋がある。又佐藤春夫氏の小説に明に Blake に由來すると思はれる題名の「病める薔薇」(後に「田園の憂鬱」と改題)があり、その中に *The Sick Rose* の最初の行の、恐らく作者自身の、邦譯が見える。是等多数の文献は比較的よく今日の讀者に知られて居ると思はれるし、又今その一々に就て記述する紙幅の餘裕がないから、末尾の日本ブレイク文献目録にその名を擧げるに止める。ただ茲に附記して置きたいのは明治 30 年代に東京帝國大學でなされた Lafcadio

Hearn の Blake に関する幾つかの講義は後に *Interpretations of Literature* (New York, 1916), *Some Strange English Literary Figures of the Eighteenth and Nineteenth Centuries* (Tokyo, 1927), 及び「小泉八雲全集」第 14 卷(昭和 2 年—1927, 東京)に収録發表されたが、孰れも洞察あり理解に富める優れた解説であること、及びその頃夏目漱石氏が夙に W.M. Rossetti の Blake 詩集¹を讀んで居られ、該詩集への書き込みが氏の歿後「漱石全集」の別冊(大正 9 年, 昭和 4 年, 東京)に發表されたのは意外にして當然なる事柄であつたと云ふことである。

III

次表は吾邦 Blake 學者の参考に資する目的で作成した日本ブレイク文献の簡約目録で、既出壽岳文章氏の「キルヤム ブレイク書誌」の撮要に補訂を加へたもの、詳細は同書誌を参照せられたい。尙調査未了のため茲に除外した現行中等學校英語教科書中の Blake 文献は他日追補の機會を得たいと思ふ。

¹ *The Poetical Works of William Blake, Lyrical and Miscellaneous*, edited, with a Prefatory memoir, by William Michael Rossetti. London, 1890. [The Aldine Edition].

日本ブレイク文献目録

i. 専載本.

(a) 翻刻, 註釋.

Select Poems of William Blake. Edited with Introduction and Notes by Makoto Sangu. [Kenkyusha English Classics]. 大正 14 年 (1925).

Select Poems of William Blake (土居光知編 Text). 輕井澤夏期大學. 昭和 2 年 (1920).

(b) 評傳, 翻譯.

キ アム・ブレイク. 柳宗悅著. 東京, 洛陽堂. 大正 3 年 (1914).

ブレイクの言葉. 柳宗悅譯註. 東京, 叢文閣. 大正 10 年 (1921).

ブレイク選集. 山宮允譯. 東京, アルス. 大正 11 年 (1922). [アルス泰西名詩選].

ブレイク詩集. 渡邊正知譯. 東京, 聚英閣. 大正 12 年 (1923).

ブレイク詩集. 尾關岩二譯. 東京, 文英堂. 大正 15 年 (1926).

ウィリアム・ブレイク. 幡谷正雄著. 東京, 新生堂. 昭和 2 年 (1927).

ブレイク詩集. 幡谷正雄譯. 東京, 新潮社. 昭和 2 年 (1927).

ii. 雜載本.

歐米名家詩集上卷. 大和田建樹輯譯. 東京, 博文館. 明治 27 年 (1894).

英文學史. 第一部文學科講義. 坪内雄藏講述. 東京, 東京專門學校出版部. 年代未詳(明治 34 年以前).

文藝論集. 文學士上田敏著. 東京, 春陽堂. 明治 34 年 (1901).

英文學史. 文學博士坪内雄藏著. 東京, 東京專門學校出版部. 明治 34 年 (1901).

對譯英米名家詩抄. 第一集薄もみぢ. 文學士小野竹三編. 東京, 内外出版協會. 明治 37 年 (1904).

英文學史. 文學士淺野和三郎著作. 東京, 大日本圖書株式會社. 明治 40 年 (1907) 及其後.

英國文學史. 文學士栗原基 文學士藤澤周次共編. 東京, 博文館. 明治 40 年 (1907).

文學論. 夏目漱石著. 東京, 春陽堂. 明治 40 年 (1907) 及其後.

有明集. 蒲原有明著. 東京, 易風社. 明治 41 年 (1908).

英米百家詩選. 宮森桃潭 小林潛龍譯註. 東京, 三省堂. 明治 41 年 (1908).

近代文學十講. 厨川白村著. 訂正三版. 東京, 大日本圖書株式會社. 大正 2 年 (1913) 及其後.

英詩評釋. 櫻井鷗村著. 東京, 丁未出版社. 大正 3 年 (1914).

善悪の觀念。 ウィルヤム・バツトラー・イエーツ著。 山宮允譯。 東京、東雲堂。 大正 4 年 (1915)。

現代の西洋繪畫。 岡島狂花著。 東京、丙午出版社。 大正 4 年 (1915)。

近世美術。 木村莊八著。 東京、洛陽堂。 大正 4 年 (1915)。

英和對譯詳註タゴールの詩と文。 花園綠人著。 東京、ジャパントイムス學生號出版所。 大正 4 年 (1915)。

文學の本質。 松浦一著。 東京、大日本圖書株式會社。 大正 4 年 (1915)。

泰西の繪畫及び彫刻。 繪畫篇第二卷。 洛陽堂編纂。 東京、洛陽堂。 大正 4 年 (1915)。

東西文學比較評論。 高安月郊著。 東京、高安三郎。 大正 5 年 (1916)。

譯註現代英詩鈔。 文學士山宮允著。 東京、有朋館書店。 大正 6 年 (1917)。

ダンテ神曲地獄篇。 中山昌樹譯。 東京、洛陽堂。 大正 6 年 (1917)。

天才の手紙。 小泉鐵編。 東京、阿蘭陀書房。 大正 7 年 (1918)。

少年藝術史ニール河の艸。 木村莊八著。 東京、洛陽堂。 大正 8 年 (1919)。

現代英文學講話。 小日向定次郎著。 東京、研究社。 大正 8 年 (1919) 及其後。

宗教と其の眞理。 柳宗悅著。 東京、叢文閣。 大正 8 年 (1919)。

泰西名詩名譯集。 生田春月編。 東京、越山堂。 大正 8 年 (1919)。

ブラウニング・サウル。 齋藤勇譯。 東京、岩波書店。 大正 9 年 (1920) 及其後。

漱石全集別冊。 東京、漱石全集刊行會。 大正 9 年 (1920) 及其後。

訂正全譯天才論。 ロンプロゾオ原著。 辻潤譯。 東京、三星社出版部。 大正 9 年 (1920)。

日本現代名詩集。 井上康文編。 東京、春陽堂。 大正 9 年 (1920)。

白樺十周年記念集。 東京、白樺社。 大正 9 年 (1920)。

英詩愛吟集。 ニコルズ教授朗讀レコード・テキスト。 市河三喜選註。 兵庫縣豊地局區内、日英樂社。 大正 11 年 (1922)。

英國神秘詩鈔。 日夏耿之介譯。 東京、アルス。 大正 11 年 (1922) [アルス泰西名詩選]。

有明詩集。 蒲原有明著。 東京、アルス。 大正 11 年 (1922) 及其後。

文學序説。 土居光知著。 東京、岩波書店。 大正 11 年 (1922)。

近代神秘説。 日夏耿之介譯。 東京、新潮社。 大正 11 年 (1922)。

詩と歌詞。 詩と音樂の會同人編。 大正 12 年 (1923)。

英文學史。 小日向定次郎著。 全 2 卷。 京都、文献書院。 大正 12 年 (1923)。

神に就て。 柳宗悅著。 大阪、大阪毎日新聞社。 大正 12 年 (1923)。

武者小路實篤全集。 12 卷。 東京、藝術社。 大正 12 年 (1923) — 昭和 3 年 (1928)。

英詩鑑賞。 齋藤勇著。 2 卷。 東京、研究社。 大正 13 年 (1924) 及其後。

英國兒童詩選集。 小山鬼子三編。 東京、株式會社文明書院。 大正 13 年 (1924)。

ペーター研究。 工藤好美著。 東京、京文社。 大正 13 年 (1924)。

三方面。 武者小路實篤著。 東京、新しき村出版部。 大正 13 年 (1924)。

- 厨川白村集. 第1—2卷. 文學論. 東京, 厨川白村集刊行會. 大正13—14年(1924—1925).
- English Romantic Poems.* Edited and Annotated by J. Gemma. Tokyo, Maruzen Company. 大正13年(1924).
- 神秘思想と近代詩. 日夏耿之介著. 東京, 春秋社. 大正13年(1924). [早稲田文學パンフレット].
- 貧民詩歌史論. 第一卷. 井上増吉譯著. 東京, 八光社. 大正13年(1920).
- 詩百篇. 武者小路實篤自選. 日向, 新しき村出版部. 大正14年(1925).
- 近代繪畫史論. 植田壽藏著. 東京, 岩波書店. 大正14年(1925).
- 近世歐洲繪畫十二講. 伊達俊光著. 東京, 新潮社. 大正14年(1925).
- 文藝辭典. 創元社編. 東京, 創元社. 大正14年(1925).
- 動き行く墓場. 岩橋武夫著. 東京, 警醒社. 大正14年(1925).
- 英米新詩選. 山宮允著. 東京, 大阪, 寶文館. 大正14年(1925).
- 詩獄に登る. 山宮允著. 東京, 大雄閣. 大正14年(1925).
- 西洋美術の知識. 一氏義良著. 東京, アルス. 大正14年(1925).
- ブルック英文學史. 濫觴より現代に到る. ストップフオード・ブルック著, チェオヂ・サムプスン補. 石井誠譯. 東京, 東光閣書店. 大正14年(1925).
- 野口米次郎ブックレット. 35冊. 東京, 第一書房. 大正14年(1925)—昭和2年(1927).
- Select Poems of Algernon Charles Swinburne.* Edited by Takeshi Saito. Tokyo: Kenkyusha. 大正15年(1926).
- 世界名詩寶玉集. 英國編. 松山敏編. 東京, 新時代文藝社. 大正15年(1926).

- An Anthology, Containing One Hundred and Fifty of the Best Short Poems in the English Language from the Time of Spenser to the Present Day.* Chosen and Fitted with Introduction and Notes by Adrian Coats. Kobe, Kawase & Sons. 大正15年(1926). [The Kawase Series].
- 英詩の味ひ方. 伊東勇太郎著. 東京, 大同館. 大正15年(1926).
- Poems on Evening and Night.* From Gray to Our Time. Edited with Glossarial Notes by Y. Otagiri. Tokyo, The Hokuseido Press. 大正15年(1926).
- 最近英詩概論. 厨川白村著. 東京, 福永書店. 大正15年(1926).
- 厨川白村集補遺. 最近英詩概論. 東京, 厨川白村集刊行會. 大正15年(1926).
- 近代の英文學. 福原麟太郎著. 東京, 研究社. 大正15年(1926).
- 折れた翼. 吉田泰司著. 東京, 岩波書店. 大正15年(1926).
- 近代英文學史. 矢野峰人著. 東京, 第一書房. 大正15年(1926).
- 變態作家史. 井東憲著. ‘變態十二史’附録第二卷. 東京, 文藝資料研究會. 大正15年(1926).
- 詩學雜考. 矢野峰人著. 東京, 第一書房. 大正15年(1926).
- 世界文學物語. ジョン・マーシー著. 内山賢次譯. 東京, アルス. 大正15年(1926).
- A Hundred English Poems.* Selected by Edmund Blunden, with Notes and Illustrations. Tokyo, Kenkyusha. 昭和2年(1927).

Gems of English Poetry. First Series. Collected by Makoto Sangu. Okayama. 昭和2年(1927). [Printed for private circulation].

Lectures in English Literature. Given in the Imperial University, Tokyo. By Edmund Blunden. First Series. Tokyo, Kodokwan. 昭和2年(1927).

ウィリアム・バトラ・イエイツ研究. 尾島庄太郎著. 東京, 泰文社. 昭和2年(1927).

Some Strange English Literary Figures of the Eighteenth and Nineteenth Centuries. In a Series of Lectures by Lafcadio Hearn. Edited by R. Tanabe. Tokyo, The Hokuseido Press. 昭和2年(1927).

人類の意志のまゝ. 武者小路實篤著. 東京, 春秋社. 昭和2年(1927).

英文學史要. 横山有策著. 東京, 泰文社. 昭和2年(1927).

泰西名詩の味ひ方. 畑喜代司著. 東京, 資文堂. 昭和2年(1927).

抒情英詩集. 中村爲治譯. 東京, 研究社. 昭和2年(1927).

A History of English Literature. In a Series of Lectures by Lafcadio Hearn. 2 Vols, with a Supplement to Vol. 1. Tokyo, The Hokuseido Press. 昭和2年(1927).

小泉八雲全集. 第14卷. 東京, 第一書房. 昭和2年(1927)及其後.

思想を中心とせる英文學史. 齋藤勇著. 東京, 研究社. 昭和2年(1927)及び以後.

アメリカ文學. 高垣松雄著. 東京, 研究社. 昭和2年(1927).

Movements in Modern English Poetry and Prose. By Sherard Vines. With an Introduction by G. S. Gordon. The Ohkayama Publishing Co., Tokyo. 1927 (昭和二年).

文藝大辭典. 菊池寛校閲. 齋藤龍太郎編著. 東京, 文藝春秋社出版部. 昭和3年(1928).

Selections from Palgrave's Golden Treasury (Book III & IV). Edited with an Introduction and Notes by Rintaro, Fukuhara. Tokyo, Kenkyusha. 昭和3年(1928). [Kenkyusha English Texts].

史的講話 趣味の英文學. 三木春雄著. 東京, 櫻木書房. 昭和3年(1928).

ラジオ放送 英詩十講. 山宮允著. 大阪, 寶文館. 昭和3年(1928).

Select Poems of William Butler Yeats. With Introduction and Notes by Kazumi Yano. Tokyo, Kenkyusha. 昭和3年(1928). [Kenkyusha English Classics].

思想家人名辭典. 春秋社編輯部編纂. 東京, 春秋社. 昭和3年(1928). [大思想エンサイクロペディア 24].

世界美術全集. 第25卷. 東京, 平凡社. 昭和4年(1929).

近世英文學史. 小日向定次郎著. 京都, 文献書院. 昭和4年(1929).

iii. 定期刊行物.

帝國文學. 第1卷第5號. 東京, 大日本圖書株式會社. 明治28年(1895)5月.

文章世界. 第5卷第7號. 東京, 博文館. 明治43年(1910)5月.

帝國文學. 第17卷第2號. 東京, 大日本圖書株式會社. 明治44年(1911).

- 白樺. 第4年1月號. 東京, 洛陽堂. 大正2年(1913)1月.
- 未來. 第1輯, 第2輯. 東京, 東雲堂. 大正3年(1914)2月, 6月.
- 新思潮. [第3次]. 2月創刊號, 7月號. 東京, 啓成社. 大正3年(1914).
- 現代詩文. 第2年第4號, 第7號. 東京, 現代詩文社. 大正3年(1914)4月, 7月.
- 白樺. 第5年4月號, 5月號, 7月號, 12月號. 東京, 洛陽堂. 大正3年(1914).
- アララギ. 第7卷第8號, 東京, アララギ發行所. 大正3年(1914)8月.
- 水滸. 第1卷第3號. 第2卷第1號, 第3號, 第4號, 第7號, 第8號. 東京, 水滸發行所. 大正3年(1914)7月, 大正4年(1915)1月, 3月, 4月, 7月, 8月.
- 白樺. 第6年2月號, 3月號. 東京, 洛陽堂. 大正4年(1915).
- 文明評論. 第2卷第3號, 第5號. 東京, 文明評論社. 大正4年(1915)3月, 5月.
- 白樺. 第7年10月號. 東京, 洛陽堂. 大正5年(1916).
- 詩人. 第2卷第3號. 東京, 詩人發行所. 大正6年(1917)3月.
- 白樺. 第8年4月號. 東京, 洛陽堂. 大正6年(1917).
- 六合雜誌. 東京. 大正6年(1917)10月.
- 英語文學. 第1卷第3號, 第5號; 第2卷第3號. 東京綠葉社. 大正7年(1918)3月, 5月, 9月.

- 早稻田文學. 東京, 早稻田文學社. 大正7年(1918)4月.
- 制作. 第2年3月號. 京都, 制作社. 大正8年(1919).
- 新しき村. 第2年6月號. 東京, 新しき村東京支部. 大正8年(1919).
- 新進詩人. 第2卷第8號. 東京, 新進詩人社. 大正8年(1919)9月.
- 早稻田文學. 東京, 早稻田文學社. 大正8年(1919)10月.
- 新潮. 東京, 新潮社. 大正8年(1919)11月.
- 藝術. 第2卷. 東京, 藝術社. 大正8年(1919).
- 英語青年. 第40卷第7號, 第41卷第5號, 第6號, 第7號. 東京, 英語青年社. 大正8年(1919).
- 白樺. 第10年3月號, 11月12月合本號. 東京, 白樺社. 大正8年(1919).
- 現代詩歌. 東京, 大正9年(1920)1月.
- 英語研究. 4月號, 5月號. 東京, 研究社. 大正9年(1920).
- 制作. 第3年6月號. 京都, 制作社. 大正9年(1920).
- 白樺. 第11年9月號. 東京, 白樺社. 大正9年(1920).
- 詩. 第1年10月號. 東京, 詩發行所. 大正9年(1920).
- アダム. 第2年. 新潟, アダム社. 大正9年(1920).
- 詩. 第2年1月號. 東京, 詩發行所. 大正10年(1921).
- 未墾地. 第2卷第1號. 東京, 未墾地社. 大正10年(1921)1月.
- 詩の泉. 4月號, 5月號. 東京, 詩の泉社. 大正10年(1921).
- 街. 東京, 街社. 大正10年(1921)6月.

- カトリック。3. 聖心號。東京，公教青年會。大正 10 年 (1921) 7 月。
新しき村。第 4 卷第 10 號。東京，新しき村東京支部。大正 10 年 (1921) 10 月。
早稲田文學。東京，早稲田文學社。大正 10 年 (1921) 10 月。
英語文學。第 5 卷第 9 號，第 10 號，第 11 號。東京，綠葉社。大正 10 年 (1921) 9 月，10 月，11 月。
藝術。第 1 卷第 3 號。東京，藝術社。大正 10 年 (1921) 12 月。
新しき村。第 5 年 3 月號。東京，新しき村東京支部。大正 11 年 (1922)。
文章俱樂部。第 7 年第 4 號。東京，新潮社。大正 11 年 (1922) 4 月。
白孔雀。第 2 輯。東京，稻門堂。大正 11 年 (1922) 4 月。
創作。第 1 年第 1 號，第 2 號。東京，創作社。大正 11 年 (1922) 4 月，5 月。
私達。第 2 年第 6 輯。東京，私達社。大正 11 年 (1922) 6 月。
早稲田文學。2 月號。東京，早稲田文學社。大正 11 年 (1922) 7 月。
詩聖。東京，玄文社。大正 11 年 (1922) 9 月。
生長する星の群。第 2 年 10 月號。東京，曠野社。大正 11 年 (1922)。
英語青年。第 48 卷第 4 號。東京，英語青年社。大正 11 年 (1922) 11 月。
生命。創刊號 岡山，生命社。大正 11 年 (1922)。
英學生の友。第 4 卷第 3 號，第 4 號，第 5 號。東京，英語普及會。大正 11 年 (1922)。
新英語。東京，大正 12 年 (1923) 1 月。
鈴蘭。第 2 輯。大阪，鈴屋書店。大正 12 年 (1923) 1 月。

- 中等英語。1 月號，9 月號。東京，研究社。大正 12 年 (1923)。
東明。第 2 卷第 12 號，第 17 號。京城，東明社。大正 12 年 (1923) 3 月 18 日，4 月 22 日。
アダム。第 6 號，第 8 號。東京，アダム社。大正 12 年 (1923) 3 月，6 月。
想苑。第 2 卷第 2 號。兵庫縣鳴尾，想苑社。大正 12 年 (1923) 4 月。
迷へる羊。第 4 號。東京，迷へる羊社。大正 12 年 (1923) 5 月。
詩。第 2 號，第 3 號。東京，詩發行所。大正 12 年 (1923) 5 月，6 月。
早稲田教育。東京。大正 12 年 (1923) 6 月。
詩と版畫。第 5 輯。東京，詩と版畫社。大正 13 年 (1924) 6 月。
東京朝日新聞。第 13650 號，第 13651 號。東京。大正 13 年 (1924) 6 月 3 日，4 日。
女子英學塾同窓會學友會々報。第 29 號。東京。大正 13 年 (1924) 7 月。
向日葵。第 1 卷第 4 號，第 6 號，終刊號。東京，向日葵詩社。大正 13 年 (1924) 8 月，10 月，12 月。
英語研究。第 17 卷第 6 號。東京，研究社。大正 13 年 (1924) 9 月。
虹。創刊號，第 2 號。東京，虹社。大正 13 年 (1924) 11 月，12 月。
鐵鏈。創刊號。東京，鐵鏈社。大正 14 年 (1925) 2 月。
虹。第 2 卷新年號，2 月號，3 月號，4 月號。東京，虹社。大正 14 年 (1925)。
受験英語。東京。大正 14 年 (1925) 3 月。

- 奢瀾都. 第2巻第2號. 東京, 奢瀾都社. 大正14年(1925)4月.
中等英語. 第13巻第4號. 東京, 研究社. 大正14年(1925)7月.
日本詩人. 第5巻第8號. 東京, 新潮社. 大正14年(1925)8月.
詩神. 第1巻第1號, 第2號, 第4號. 東京, 聚芳閣. 大正14年(1925)9月, 10月, 12月.
The Muse. Vol. 1, No. 1. Kyoto, Apollon. 大正14年(1925)10月.
詩. 永見七郎・佐々木秀光二人雜誌. 第1號. 東京, 詩發行所. 大正14年(1925).
研究社月報. 第23號. 東京, 研究社. 大正14年(1925).
涓(せう). 東京, 富士見町教會女子青年會. 大正14年(1925)12月.
詩神. 第2巻第1號. 東京, 聚芳閣. 大正15年(1926)1月.
英語研究. 第18巻第10號. 東京, 研究社. 大正15年(1926)1月.
英語青年. 第54巻第9號. 東京, 英語青年社. 大正15年(1926)2月.
アトリエ. 第3巻第2號. 東京, アトリエ社. 大正15年(1926)2月.
初等英語. 東京, 研究社. 大正15年(1926)3月.
生活者. 第1巻第7號. 東京, 岩波書店. 大正15年(1926)11月.
英文學研究. 第7巻第1, 第3. 東京, 研究社. 昭和2年(1927)1月, 7月.
鼓動. 第2號. 新潟, 新潟醫大文藝部. 昭和2年(1927)2月.
改造. 第9巻第4號. 東京, 改造社. 昭和2年(1927)4月.
二年の英語. 東京, 研究社. 昭和2年(1927)6月.

- 開拓者. 東京. 昭和2年(1927)6月.
英語青年. 第57巻, 第8號, 第9號, 第10號, 第11號, 第12號, 第58巻, 第1號, 第2號, 第3號, 第4號, 第5號, 第6號. 東京, 英語青年社. 昭和2年(1927)7月—12月.
英語研究. 第20巻第5號. 東京, 研究社. 昭和2年(1927)8月.
現代英語. 第6巻第8號. 東京, 育英書院. 昭和2年(1927)8月.
近代風景. 第2巻第7號, 第10號. 東京, アルス. 昭和2年(1927)8月11日.
讀賣新聞. 8月10日, 11日. 東京, 讀賣新聞社. 昭和2年(1927).
中外日報. 8月10日, 11日, 12日, 12月8日, 11日, 13日, 14日. 京都, 中外日報社. 昭和2年(1927).
新進詩人. 第10巻第8號. 東京, 新進詩人社. 昭和2年(1927)9月.
太陽花. 第10號. 静岡縣稻梓, 太陽花詩社. 昭和2年(1927)9月.
大調和. 第1巻第6號. 東京, 春秋社. 昭和2年(1927)9月.
第三木曜新聞. 第4號. 東京, 木曜會. 昭和2年(1927)9月22日.
木星. 第3巻第9號. 東京, 木星社. 昭和2年(1927)10月.
愛誦. 東京, 交蘭社. 昭和2年(1927)10月.
東京朝日新聞. 東京, 東京朝日新聞社. 昭和2年(1927)10月19日.
The Muse. Vol. V, No. 1. Kyoto, Apollon. 昭和2年(1927)10月.
書物の趣味. 第1冊. 神戸, ぐるりあそびさえて. 昭和2年(1927)11月.
早稻田文學. 東京, 早稻田文學社. 昭和2年(1927)11月.

- 研究社月報。第53號。東京，研究社。昭和2年(1927)11月。
- 新潟週報。第58號。新潟，新潟週報社。昭和2年(1927)11月27日
- 生活者。第2卷第10號。東京，岩波書店。昭和2年(1927)11月。
- 藝術時代。第1年第5號。新潟，藝術時代社。昭和2年(1927)12月。
- 新潟毎日新聞。第6450號。新潟，新潟毎日新聞社。昭和2年(1927)12月3日。
- 大阪朝日新聞京都版。12月7日，11日，昭和2年(1927)。
- 大阪毎日新聞京都版。12月9日。昭和2年(1927)。
- 越後タイムス。第834號，第835號。新潟縣柏崎，越後タイムス社。昭和2年(1927)12月11日，18日。
- The Japan Times*. Tokyo, Japan Times. 昭和2年(1927)。
- 越後タイムス。第836號。新潟縣柏崎，越後タイムス社。昭和3年(1928)1月1日。
- 英語青年。第58卷第7號，第8號，第9號，第10號，第11號，第12號。第59卷第11號。東京，英語青年社。昭和3年(1928)1月，2月，3月，9月。
- 中外日報。1月15日，2月17日。京都，中外日報社。昭和3年(1928)。
- 英文學研究。第8卷第1，第2，第3。東京，研究社。昭和3年(1928)1月，4月，7月。
- 大調和。第2卷第1號，第5號。東京，春秋社。昭和3年(1928)1月，5月。
- 生活者。第3卷第2號。東京，岩波書店。昭和3年(1928)2月。

- 光りへ。第13號，第16號。東京，光りへ社。昭和3年(1928)2月，5月。
- 英語街路。東京。昭和3年(1928)3月。
- 同志社文學。第2號，第3號。京都，同志社大學英文學科文學會。昭和3年(1928)5月，10月。
- 近代風景。第3卷第6號，第7號，第8號，第9號。東京，アルス。昭和3年(1928)6月，7月，8月，9月。
- 英語と英文學。第2卷第2號。東京，英文學社。昭和3年(1928)8月。
- パンテオン。V。東京，第一書房。昭和3年(1928)8月。
- 書物の趣味。第3冊第370號。京都，書物の趣味社。昭和3年(1928)12月25日。
- 生活者。第4卷第2號。東京，岩波書店。昭和4年(1929)2月。
- 越後タイムス。第910號。新潟縣柏崎町，越後タイムス社。昭和4年(1929)6月2日。
- 大阪朝日新聞。第17103號。大阪，大阪朝日新聞社。昭和4年(1929)6月28日。
- 英語青年。第61卷第5號，第8號。東京，英語青年社。昭和4年(1929)6月，7月。
- 京語帝國大學新聞。第108號。京都，京都帝國大學學友會新聞部。昭和4年(1929)7月1日。
- 聖化。第31號，第32號。群馬縣富岡町，聖化社。昭和4年(1929)7月，8月。

The Muse, Vol. VIII, No. 5. Kyoto, Apollon. 昭和4年(1929)8月1日.

iv. 展覧會目錄.

白樺主催第七回美術展覧會に際して. 東京. 大正4年(1915)2月.
爲「白樺美術館」設立 キリアムブレイク複製版畫展覧會目錄. 「白樺社」主催. 大正8年(1919)11月.

ブレイク百年記念展覧會繪畫目錄. 10月17日より20日まで. 東京朝日新聞社. 主催英詩選集刊行記念會. 昭和2年(1927).

百年忌紀念 ブレイク作品文獻展覧會出品目錄. 於恩賜京都博物館. 昭和2年自12月10日至同16日.

補 遺

本文執筆後に發見した可成重要な初期の文獻に明治43年(1910)5月發行「文章世界」第5卷第7號がある. 同誌第103-9頁に岩野泡鳴が「英詩譯解」と題し *The Little Girl Lost, The Little Girl Found* を翻譯し評釋してゐる.

【附記】 本文を草するに方り壽岳文章氏の「キルヤムブレイク書誌」を参照裨補する所頗る多かつた. 又生田春月, 生田長江, 蒲原有明, 三木露風, 西條八十, 日夏耿之介, 齋藤勇, 服部嘉香, 壽岳文章, 本間久雄, 辻村鑑, 橋田東聲, 正富汪洋, 寛五百里, 曾根保諸氏は予の照會に對して懇篤なる解答垂示を賜はり又藏書借覽の便を與へられ, 要鐵眞君は特に目錄の原稿作成に就き助力を賜つた. 記して以て謝意を表する.

山 宮 允

SONGS OF INNOCENCE AND
OF EXPERIENCE より



Introduction

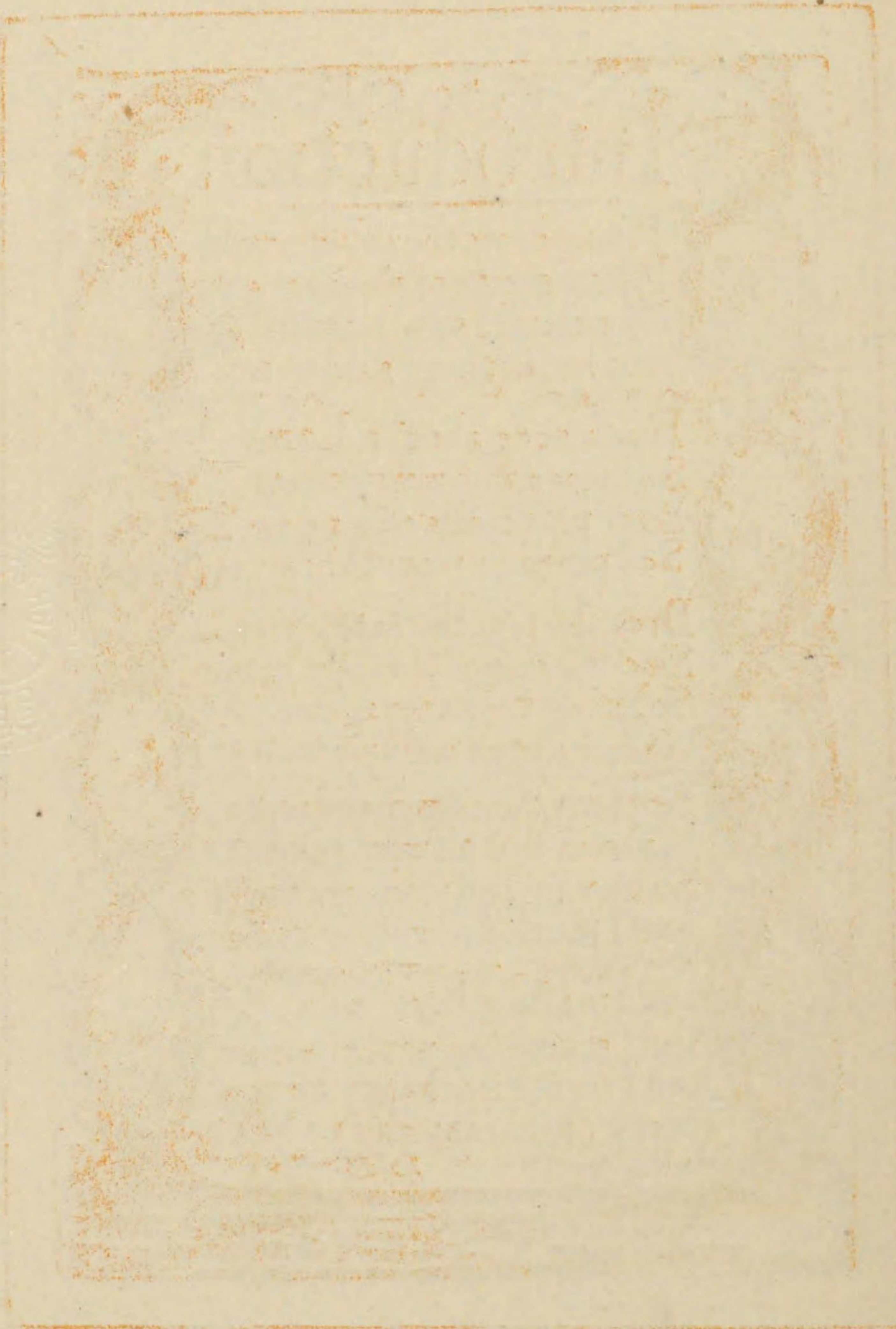
Piping down the valleys wild
Piping songs of pleasant glee
On a cloud I saw a child.
And he laughing said to me.

Pipe a song about a Lamb:
So I piped with merry cheer,
Piper pipe that song again,
So I piped, he wept to hear.

Drop thy pipe thy happy pipe,
Sing thy songs of happy cheer,
So I sung the same again,
While he wept with joy to hear.

Piper sit thee down and write
In a book that all may read,
So he vanished from my sight,
And I pluck'd a hollow reed.

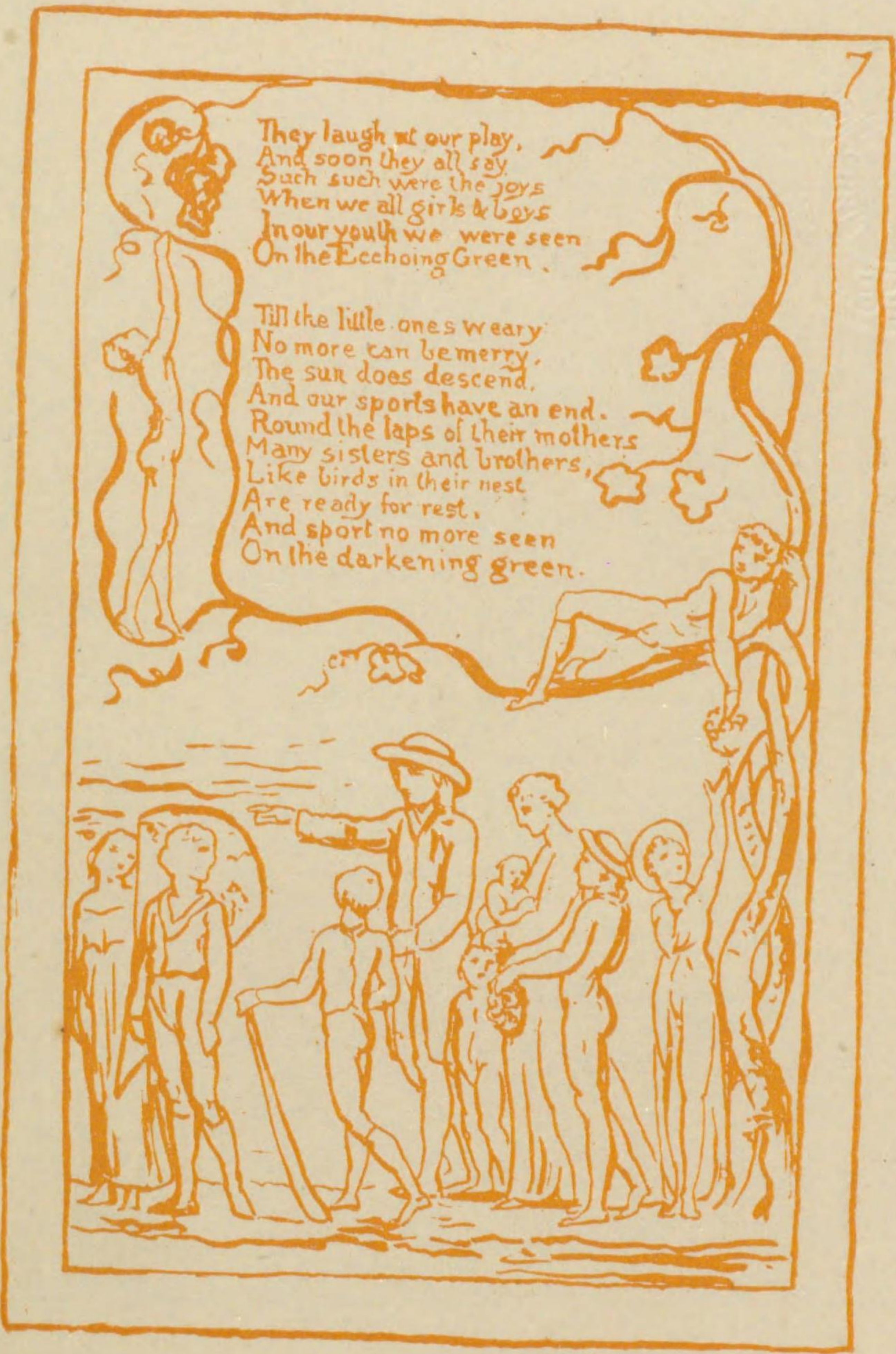
And I made a rural pen,
And I stain'd the water clear,
And I wrote my happy songs,
Every child may joy to hear.



The Echoing Green

The Sun does arise,
And make happy the skies,
The merry bells ring
To welcome the Spring,
The sky lark and thrush,
The birds of the bush,
Sing louder around,
To the bells' cheerful sound,
While our sports shall be seen,
On the Echoing Green.

Old John with white hair
Does laugh away care,
Sitting under the oak,
Among the old folk,
They



7
They laugh at our play,
And soon they all say
Such such were the joys
When we all girls & boys
In our youth we were seen
On the Echoing Green.

Till the little ones weary
No more can be merry,
The sun does descend,
And our sports have an end.
Round the laps of their mothers
Many sisters and brothers
Like birds in their nest
Are ready for rest,
And sport no more seen
On the darkening green.



8

The Lamb

Little Lamb, who made thee
Dost thou know who made thee
Gave thee life & bid thee feed;
By the stream & o'er the mead;
Gave thee clothing of delight,
Softest clothing wooly bright;
Gave thee such a tender voice,
Making all the vales rejoice;
Little Lamb who made thee
Dost thou know who made thee

Little Lamb I'll tell thee,
Little Lamb I'll tell thee;
He is called by thy name,
For he calls himself a Lamb:
He is meek & he is mild,
He became a little child:
I a child & thou a lamb,
We are called by his name.
Little Lamb God bless thee,
Little Lamb God bless thee.



The Little Black Boy

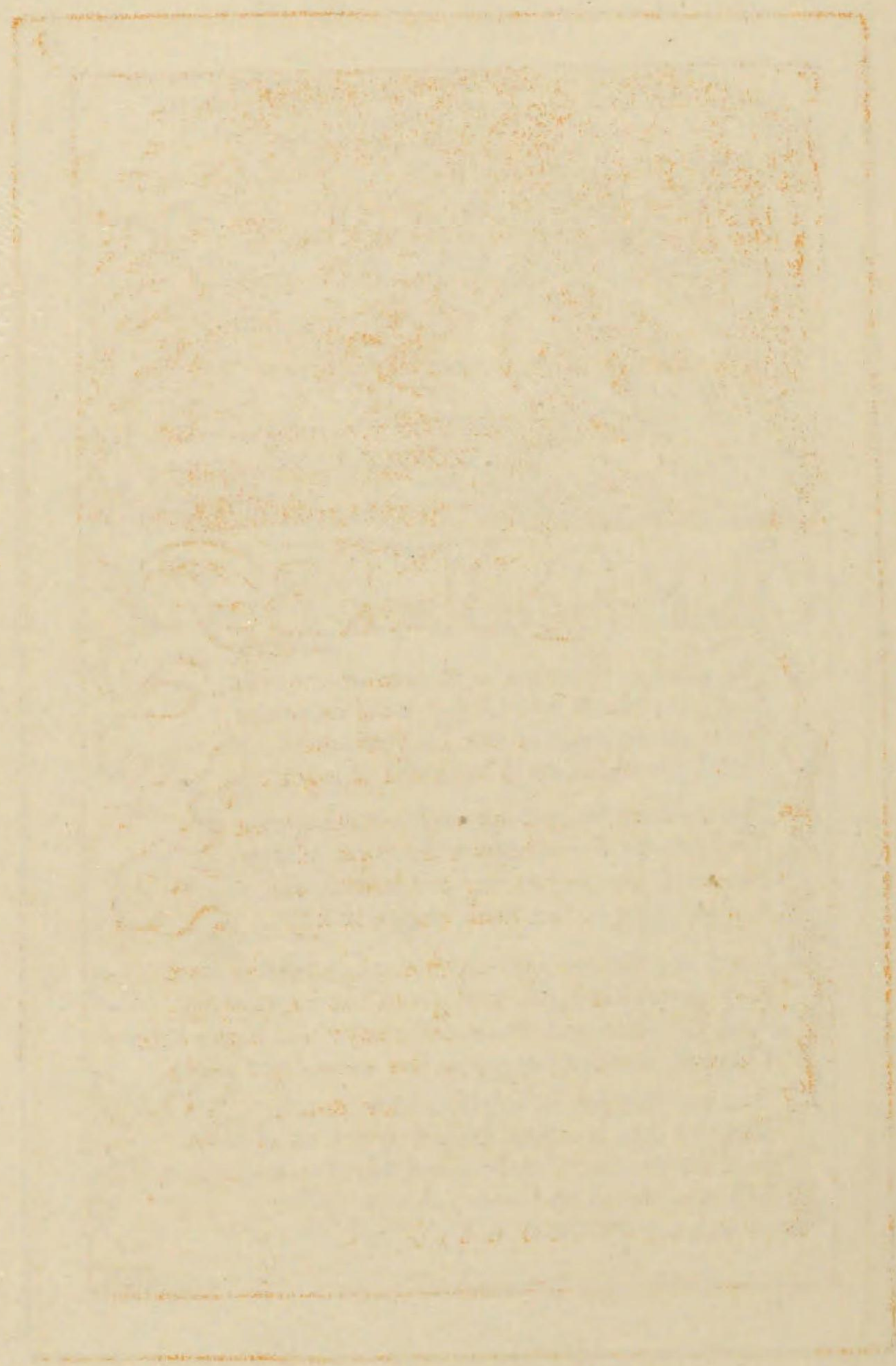
My mother bore me in the southern wild,
And I am black, but O! my soul is white.
White as an angel is the English child:
But I am black as if bereav'd of light.

My mother taught me underneath a tree
And sitting down before the heat of day,
She took me on her lap and kiss'd me,
And pointing to the east began to say.

Look on the rising sun: there God does live,
And gives his light, and gives his heat away,
And flowers and trees and beasts and men receive
Confort in mornung joy in the noon day.

And we are put on earth a little space,
That we may learn to bear the beams of love,
And these black bodies and this sun-burnt face
Is but a cloud and like a shady grove.

For



For when our souls have learn'd the heat to bear
The cloud will vanish we shall hear his voice.
Saying: come out from the grove my love & care
And round my golden tent like lambs rejoice.
Thus did my mother say and kiss'd me,
And thus I say to little English boy.
When I from black and he from white cloud free,
And round the tent of God like lambs we joy:
I'll shade him from the heat till he can bear,
To lean in joy upon our fathers knee.
And then I'll stand and stroke his silver hair,
And be like him and he will then love me





Laughing Song,

When the green woods laugh with the voice of joy
 And the dimpling stream runs laughing by,
 When the air does laugh with our merry wit,
 And the green hill laughs with the noise of it.

When the meadows laugh with lively green,
 And the grasshopper laughs in the merry scene,
 When Mary and Susan and Emily,
 With their sweet round mouths sing Ha Ha, He.

When the painted birds laugh in the shade
 Where our table with cherries and nuts is spread,
 Come live & be merry and join with me,
 To sing the sweet chorus of Ha Ha, He.



On Others Sorrow

Can I see anothers woe.
 And not be in sorrow too.
 Can I see anothers grief.
 And not seek for kind relief.
 Can I see a falling tear
 And not feel in sorrows share.
 Can a father see his child.
 Weep, nor be with sorrow filld.
 Can a mother sit and hear.
 An infant groan an infant fear.
 No no never can it be.
 Never never can it be.
 And can he who smiles on all.
 Hear the wren with sorrows small.
 Hear the small birds grief & care
 Hear the woes that infants bear.
 And not sit beside the nest
 Pouring pity in their breast
 And not sit the cradle near
 Weeping tear on infants tear.
 And not sit both night & day.
 Wiping all our tears away.
 O no never can it be.
 Never never can it be.
 He doth give his joy to all.
 He becomes an infant small.
 He becomes a man of woe
 He doth feel the sorrow too.
 Think not thou canst sigh a sighs
 And thy maker is not by
 Think not thou canst weep a tear
 And thy maker is not near.
 O he gives to us his joy
 That our grief he may destroy
 Till our grief is fled & gone
 He doth sit by us and moan



SONGS

EXPERIENCE



The Author & Printer W Blake

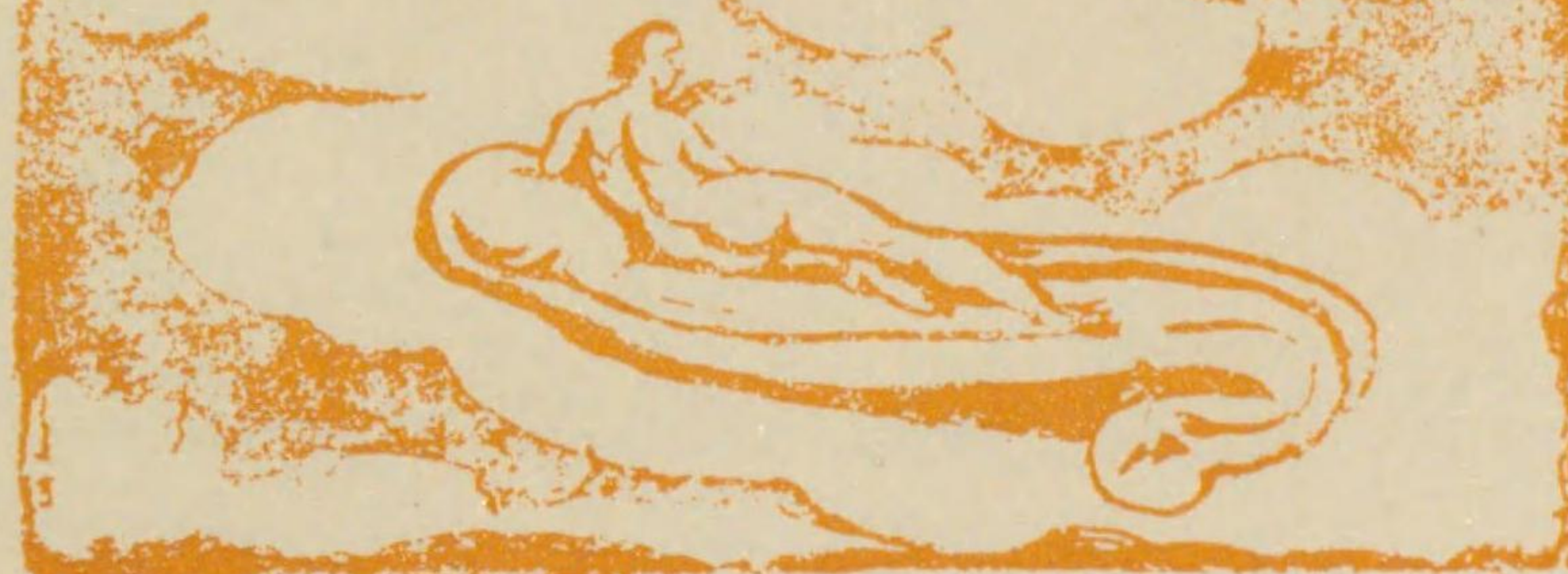
Introduction.

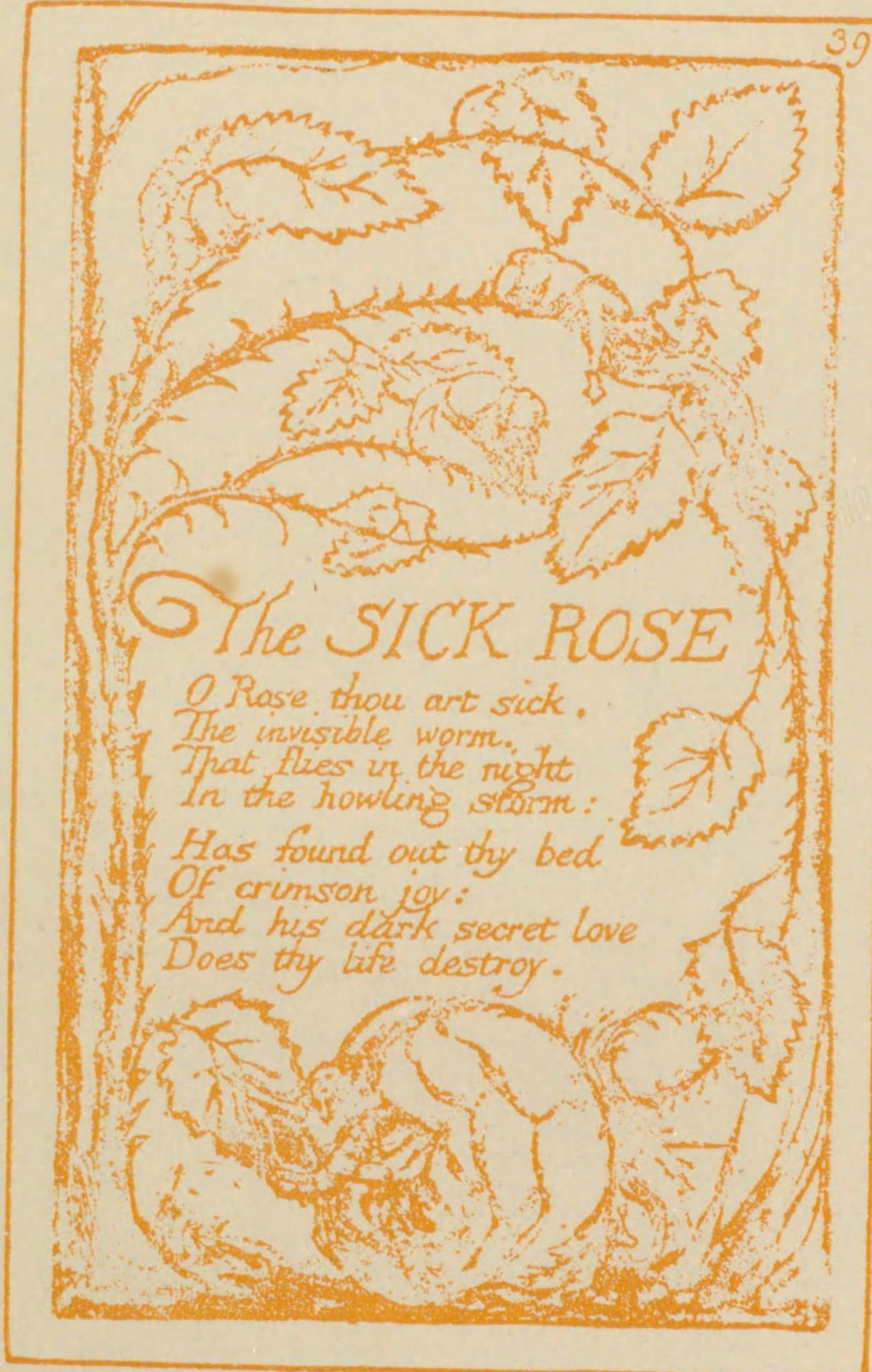
Hear the voice of the Bard!
 Who Present, Past, & Future sees
 Whose ears have heard,
 The Holy Ward,
 That walk'd among the ancient trees.

Calling the lapsed Soul,
 And weeping in the evening dew:
 That might controll
 The starry pole;
 And fallen fallen light renew!

O Earth O Earth return!
 Arise from out the dewy grass:
 Night is worn,
 And the morn,
 Rises from the slumberous mass.

Turn away no more:
 Why wilt thou turn away
 The starry floor
 The watry shore
 Is givn thee till the break of day





The SICK ROSE

*O Rose, thou art sick,
The invisible worm,
That flies in the night
In the howling storm:
Has found out thy bed
Of crimson joy:
And his dark secret love
Does thy life destroy.*

The Tyger.

Tyger Tyger, burning bright,
In the forests of the night;
What immortal hand or eye,
Could frame thy fearful symmetry?

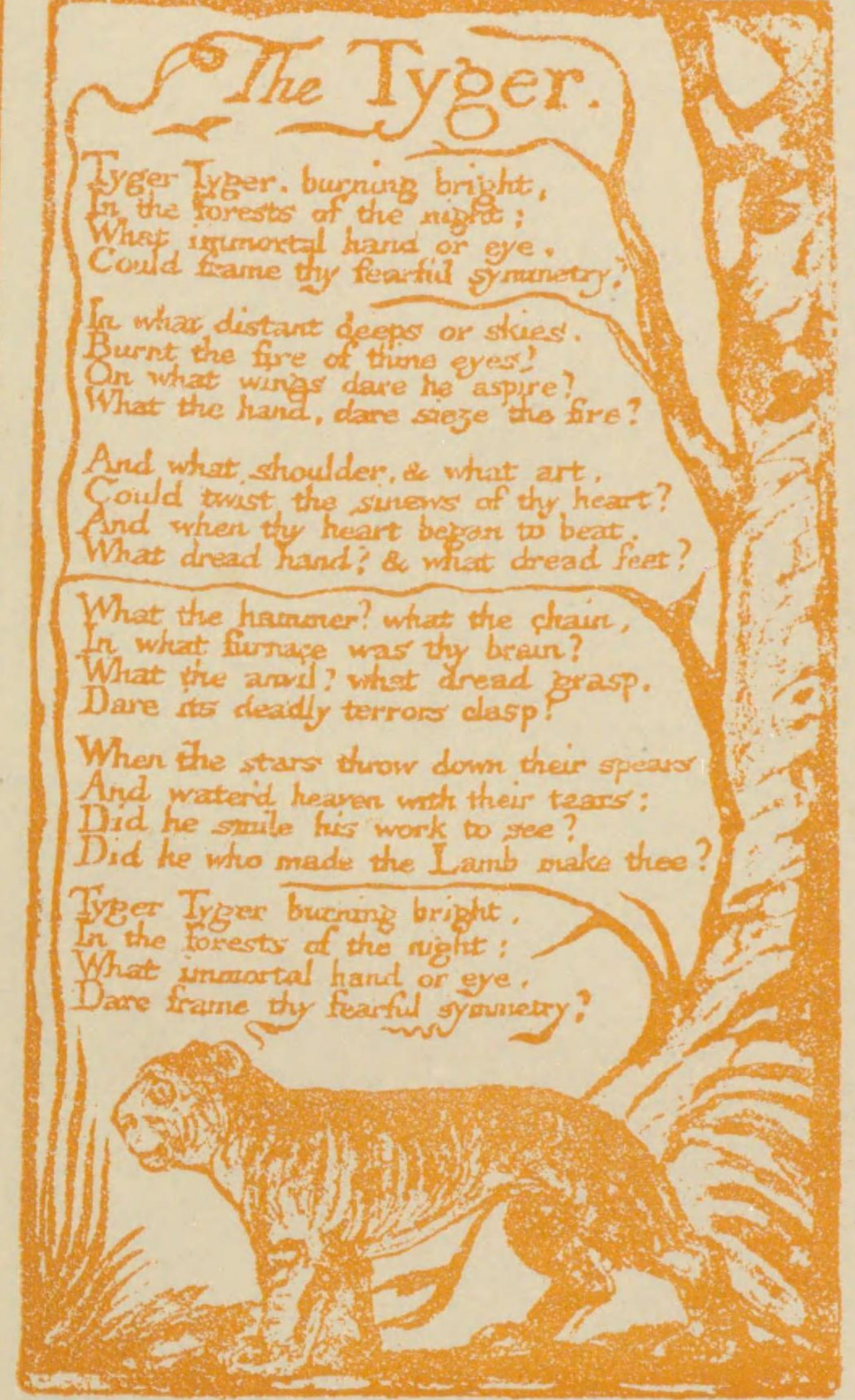
In what distant deeps or skies,
Burnt the fire of thine eyes?
On what wings dare he aspire?
What the hand, dare seize the fire?

And what shoulder, & what art,
Could twist the sinews of thy heart?
And when thy heart began to beat,
What dread hand? & what dread feet?

What the hammer? what the chain,
In what furnace was thy brain?
What the anvil? what dread grasp,
Dare its deadly terrors clasp!

When the stars threw down their spears
And water'd heaven with their tears:
Did he smile his work to see?
Did he who made the Lamb make thee?

Tyger Tyger burning bright,
In the forests of the night;
What immortal hand or eye,
Dare frame thy fearful symmetry?



The Human Abstract.

Pity would be no more,
If we did not make somebody Poor;
And Mercy no more could be,
If all were as happy as we;

And mutual fear brings peace;
Till the selfish loves increase.
Then Cruelty knits a snare,
And spreads his baits with care.

He sits down with holy fears,
And waters the ground with tears;
Then Humility takes its root
Underneath his foot.

Soon spreads the dismal shade
Of Mystery over his head,
And the Caterpillar and Fly,
Feed on the Mystery.

And it bears the fruit of Deceit,
Ruddy and sweet to eat;
And the Raven his nest has made
In its thickest shade.

The Gods of the earth and sea,
Sought thro Nature to find this Tree,
But their search was all in vain,
There grows one in the Human Brain.



索引

<p>「あ日ぐるまや」 176 「あゝ、向日葵」 182 Abbey Theatre 141, 143 アダム 203, 205 Adam and Eve and the Archangel Raphael (<i>Platino-</i> <i>tinotype</i>) 158 Addison 34, 40 A.E., 67, 83 n., 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145 Ah, Sunflower 176, 182 愛誦 207 芥川龍之介 184 All Religions Are One 61 America: A Prophecy 12, 62 アメリカ文學 200 Ancient Britons, The 27 Ancient of Days, The 77 ANCIENT OF DAYS, by Blake THE (着色浮彫腐蝕版畫) 66-7 Ancient of Days putting a compass to the Earth, The (<i>colour-print</i>) 159 André, P. 82 Annotated Lists of Blake's Paintings, Drawings and Engravings 124 Anthology Containing One Hundred and Fifty of the Best Short Poems in the English Language &c.. An 199 Appelles 95</p>	<p><i>Approach of Doom, The</i> 77 アララギ 202 有明詩集 197 有明集 176, 178, 195 旭正秀 192 淺野和三郎 173, 195 新しき村 203, 204 アトリエ 206 <i>Auguries of Innocence</i> 49 n., 53 n., 90 n., 94 n., 184 <i>Awestruck Group Standing on a Rock by the Sea, An</i> 77 AWESTRUCK GROUP STAND- ING ON A ROCK BY THE SEA, by Blake, AN (浮彫 腐蝕版畫) 132-3 Bacon, 39 Ba-Han, Manny 164 馬琴 34 <i>Bard from Gray, The</i> 27 <i>Barry: a Poem and Book of Moonlight</i> 64 Basire, James 4, 5, 60, 68, 69, 71, 109 Beerbohm 136 Beethoven 33 Berger, Pierre 126, 149, 155, 160, 161, 162, 165, 166, 167, 168 Beulah 50 n. <i>Bibliographical Introduc- tion</i> 120</p>
---	--

<i>Bibliography of William</i>	「ブレイクの思想」	188
<i>Blake, A</i> 116, 132, 154, 155, 164, 191	「ブレイク選集」	188, 194
Binyon, Laurence 74, 77, 78, 110, 113, 114, 128, 129, 130, 133-8, 150, 151, 152, 153, 154, 156, 169	ブレイク詩集(幡谷)	190, 194
Blair 27, 28, 29, 64, 72, 128	ブレイク詩集(尾關)	189, 194
Blair's Grave (<i>Platinotype</i>)	ブレイク詩集(渡邊)	188, 194
<i>Blake</i> (Aldine Edition)	<i>Blake's Heads of the Poets</i>	150
<i>Blake</i> (by Short)	<i>Blake's Innocence and Experience</i> (by Wicksteed)	131
Blake, Catherine 2, 66	Blake Society	146, 147, 149, 151
Blake, Catherine Elizabeth 3, 59	<i>Blake's Vision of the Book of Job, with Reproductions of the Illustrations, a Study</i>	128
Blake, Ellen 2	Blue Stockings, The	11
Blake, James (father) 2	Blunden, Edmund	192, 199, 200
Blake, James (son) 3, 11, 12	Böcklin	67
Blake, John 3, 59	Boehme	36, 47, 51, 86, 88
Blake, Robert 3, 12, 35, 59, 61, 73	Boileau	39
Blake, William 1-66, 67-85, 86-97, 102, 104, 108, 109, 110, 113, 114, 115, 116, 117, 119, 120, 121, 122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129, 130, 131, 133, 135, 136, 137, 138, 145, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 155, 156, 157, 158, 160, 163, 164, 165, 166, 169, 170, 172, 174, 176, 178, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 192, 191, 193	<i>Book of Ahaniah, The</i>	13, 63, 77
<i>Blake for Babes</i>	<i>Book of Job, The</i>	28, 30, 66, 124, 128
ブレイク百年記念展覧會繪畫目録	<i>Book of Job, The (Platinotype.)</i>	158
「ブレイクの言葉」	<i>Book of Los, The</i>	13, 63, 77
182, 184, 187, 188, 194	<i>Book of Thel, The</i>	12, 62, 157
「ブレイクの詩集より」	THE BOOK OF THEL, by Blake の扉 (着彩浮彫腐蝕版)	66-7
184	<i>Book of Urizen, The</i>	12
ブレイク作品文献展覧會出品目録	Botticelli	136
210	Boucher	8, 60, 61
	Boucher, Catherine Sophia	8
	Bridges, Robert	149
	ブルック英文學史	198
	Browne, Sir Thomas	121, 152
	ブラウニング、サウル	196
	文學序説	197
	「文學の本質」	196

文學論	175, 195	Colour-printed Drawing	78
文藝大辭典	201	Colum	140
文藝辭典	198	<i>Complaint of Job, The</i> (水彩畫)	84
文藝論集	172, 195	'Comus' Series (水彩畫)	83
「文庫」	178	Connoe, Daniel H.	126
「文明評論」	186, 202	Cousins	144
Bunyan, John	34, 148	<i>Cowper and Blake</i>	151
文章俱樂部	204	Cowper, William	14, 22, 40, 147
文章世界	210	Cowper Society	147, 151
Butterworth, Adeline M.	128, 149	Crabbe, George	40
Burdett, Osbert	127	Creation of Eve, The (Platinotype)	158
Bürger	63	<i>Creation of Light, The</i>	114
Bury, Lady Charlotte	30	<i>Crystal Cabinet, The</i>	175
Butts, Captain Thomas	14, 20, 25, 63, 66	Cromek	28, 29, 64
		Cumberland	65
C agliostro	47		
Calvert, Edward	67, 81, 110, 113	大調和	207, 208
Canova	2	第三木曜新聞	207
<i>Canterbury Pilgrims, The</i>	27, 29	Damon, Foster	126, 135, 154
<i>Canterbury Pilgrims, The (engraving)</i>	159	Dante	34
着彩及び未着彩浮彫版畫	70	<i>Dante</i>	30, 66
<i>Characters in Spenser's Faerie Queene</i>	150	<i>Dante</i> 畫譜	69, 83
<i>Chaucer's Canterbury Pilgrims</i>	120	ダンテ神曲地獄篇	196
Chaucer, Geoffrey	27	伊達俊光	198
<i>Christ in the Sepulchre</i>	27	David delivered out of Many Waters (<i>Platinotype</i>)	158
中外日報	207, 208	'Death of Earl Goodwin'	7
中等英語	205, 206	<i>Death of Ezekiel's Wife, The</i> (水彩畫)	84
Clark	140	Death on the Pale Horse (<i>Colour-print</i>)	159
<i>Clod and the Pebble, The</i>	184	Death on the Pale Horse (<i>Platinotype</i>)	158
Coats, Adrian	99	Defoe, Daniel	40, 143, 147
Collins, William	40	Deism	38

索	引	244
De Quincey, Thomas	34	英國神祕詩鈔 197
Descartes	39	英國兒童詩選集 197
Discourses	64	英詩愛吟集 197
Descriptive Catalogue	27, 29, 65, 120	「英詩評釋」 183, 195
Design—Book of Thel	159	英詩十講 201
Divine Image, The	54 n., 115, 128	英詩鑑賞 197
土居光知	185, 192, 194, 197	英詩の味ひ方 199
「獨絃哀歌」	176	英和對譯詳註タゴールの詩と文 196
Donne, John	121, 152	Elijah in the Fiery Chariot (Colour-print) 159
同志社文學	209	Elijah about to Ascend in the Chariot of Fire 81
Drawings and Engravings of William Blake, The	129, 138	ELIJAH ABOUT TO ASCEND IN THE CHARIOT OF FIRE, by Blake (押繪) 66-7
Dream of Tirathatha, The (colour-print)	159	Elizabaeth 39
Dulac, Edmund	137	Ellis, Edwin John 117, 118, 119, 124, 125, 149
Dürer, Albrecht	3, 67, 68, 95	Emerson 86
越後タイムス	208, 209	English Romantic Poems 198
Echoing Green, The	170	Engraved Designs of William Blake, The 77, 78 n., 129, 138
英米百家詩選	181, 195	Engraving 68, 70, 71-2
英米新詩選	198	Engravings on Pewter; or Pewter Woodcut 70, 81
英文學研究	206, 208	Engravings of William Blake, The 129
英文學史(淺野)	173, 195	Etching 70, 77
英文學史(小日向)	197	Europe 12
英文學史(坪内)	173, 195	Europe: a Prophecy 63
英文學史要	200	Everlasting Gospel, The 27, 65
英學生の友	204	Eve Tempted by the Serpent (テムペラ) 84
英語文學	204	EVE TEMPTED BY THE SERPENT, by Blake (テムペラ) 154-5
英語と英文學	209	
英語研究	203, 205, 206, 207	
英語街路	209	
英語青年	203, 204, 206, 207, 208, 209	
英國文學史	173, 195	

245	索	引
Examiner, The	29, 64	the First, The 62
Ezekiel	35	藤澤周次 173, 195
Ezekiel, "I take away from thee the desire of thine eyes"	71	福原麟太郎 192, 199, 201
FACSIMILE PAGE FROM JERUSALEM, by Blake (浮彫腐蝕版)	66-7	Fuseli, Hans Rudolf 7, 14, 110, 113
Factory Echoes and Other Sketches	139	Gates of Paradise, The 12, 65, 122, 157
Faithful, The	144	「藝苑」 178
Father's Memoirs of His Child, A	64	藝術 203, 204
Felpham	21	藝術時代 208
Fielding, Henry	40	Gemma, J. 198
Figgis, Darrell 78, 129, 130, 135, 136		Gems of English Poetry 200
フィリップス 188, 189		現代英文學講話 196
[First] Book of Urizen 63		現代英語 207
Flaxman, John 7, 11, 14, 19, 20, 28, 60, 61, 63, 69, 110		現代の西洋繪畫 196
Fly, The 176, 182		「現代詩文」 182, 202
Followers of William Blake, The 113, 138		現代詩歌 203
For Children: The Gates of Paradise 62		Genji 144
For the Sexes, The Gates of Paradise 157		Ghost of Abel, The 12, 66
FOR THE SEXES THE GATES PARADISE, by Blake (浮彫版畫) 132-3		Ghost of a Flea, The (テムペラ) 85
Four Zoas (Vala), The 63, 119, 120		Gilchrist, Alexander 2, 4, 7, 8, 25, 33, 108, 123, 124, 126, 148
Fox, R. M. 139		Gilchrist, Anne 123
French Revolution, The 13		Glad Day 69, 71
French Revolution, Book		Glad Day (押繪) 78
		GLAD Day, by Blake (押繪) 66-7
		Glad Day (Colour-print) 159
		Godwin 13
		Going to and fro in the Earth 125
		Goldsmith, Oliver 40
		Gothicism 68
		Grassby, Percy 74
		Grave, The 28, 29, 64, 72, 128
		Gray, Thomas 40

<i>Greek Studies</i>	172	<i>Century to the Year 1914,</i>	
Gregory, Lady	139	A	85
Grierson, H.J.C.	149	History of the Bunhill	
		Fields Burial Ground	148
		一氏義良	198
「蠅」	176, 182	「保姆の歌」	182
「廢園」	180	Holcroft	13
花園兼定	192	Hollyer, Frederick	
花園綠人	196	128, 130, 135, 156, 157	
版畫	68	<i>Hollyer's Reproductions of</i>	
濱林生之助	192	<i>Blake's Works</i>	130
Harrison	69	本間久雄	210
長谷川潔	185	Hood, Tom	113
Hasegawa, Luc	134	Housman, Laurence	118
橋田東聲	210	<i>Hundred English Poems,</i>	
畑喜代司	200	A	199
幡谷正雄	187, 189, 190, 194	Huneker, James	181
服部嘉香	182, 184, 210	' <i>Hymn on the Nativity</i> '	
Hayley, William		<i>Series</i> (水彩畫)	83
14, 19, 21 n., 22, 25, 28, 63		Hunt, Leigh	29, 64
<i>Hecate</i>	81	Hyde, Dr.	139
Hearn, Lafcadio	192-3, 200		
Hemskerk	3, 68	市 河三喜	192, 197
變態作家史	199	井手義行	185
Hervey's <i>Meditations</i> (<i>Platotype</i>)	158	<i>Ideas of Good and Evil</i>	
Higgins	140	110 n., 146	
光りへ	209	生田長江	178, 210
向日葵	205	生田光太郎	192
日夏耿之介	192, 197, 198, 210	生田春月	177, 178, 196, 210
Hind, Arthur M.	85	" <i>Illuminated Printing</i> "	
Hind, Lewis C.	149	12, 13, 35, 61, 67, 70, 73	
貧民詩歌史論	198	<i>Illustrations to Dante's In-</i>	
<i>History of England, The</i>	62	<i>ferno</i> (低彫版畫)	72
<i>History of English Literature, A</i> (Hearn)	200	" <i>Illustrations to the Book</i>	
<i>History of Engraving and Etching from the 15th</i>		<i>of Job</i> " (低彫版畫)	70, 72
		<i>Illustrations to the Book of</i>	
		<i>Thel</i>	78

<i>Illustrations to Thornton's</i>		<i>Job in Prosperity</i>	81
<i>Virgil</i>	81	<i>Job, "What is man that</i>	
" <i>Illustrations to Young's</i>		<i>thou shouldest try him</i>	
<i>Night Thoughts</i> "	70	<i>every moment</i> "	71, 132-3
<i>Il Penseroso</i>	113	Johnson, J.	13, 14, 60, 62, 69
<i>Infant Jesus Riding on a</i>		Johnson, Samuel	40
<i>Lamb, The</i> (Tempera)	84	<i>Joseph of Arimathea among</i>	
<i>Inferno</i>	34	<i>the Rocks of Albion</i>	69, 72, 109
井上康文	197	JOSEPH OF ARIMATEA	
井上増吉	193	AMONG THE ROCKS OF	
井上思外雄	192	ALBION, by Blake (低彫	
<i>Interpretations of Literature</i>	193	版畫)	132-3
<i>Introduction to Songs of Innocence</i>	173, 174	女子英學塾同窓會學友會々報	205
<i>Irish Statesman, The</i>	139	Joyce, James	140
石井誠	198	壽岳文章	173, 183, 184 n., 187, 192, 210
石川速水	185	抒情英詩集	200
井東憲	199	受験英語	205
伊藤長藏	190	Julius, Dr.	185
<i>Island in the Moon, An</i>	61, 118		
伊東勇太郎	192, 199	寛 五百里	210
伊津野直	192	神に就て	197
岩橋武夫	198	要鐵眞	210
岩野泡鳴	210	蒲原有明	176, 177, 195, 197, 210
		カトリック	203
		河原宏	192
<i>Jacob</i>	36	川路柳虹	184
<i>Jacob's Dream</i>	27	Keble	114
<i>Jacob's Ladder</i>	83	研究社月報	206, 208
Jansen	47	Keynes, Geoffrey	51 n., 53 n.
<i>Japan Times, The</i>	208	88 n., 90 n., 116, 118, 119, 121	
Jenkins, Herbert	127, 148, 149	122, 131, 132, 135, 149, 151,	
<i>Jerusalem</i>	26, 36, 63, 64, 65, 87,	152, 153-5, 164, 191	
108 n., 120		菊池寛	143, 184, 201
人類の意志のまゝ	200	木村莊八	196
Job	72	近代文學十講	195
Job	137	近代英文學史	199

近代風景	207, 209	Leach, Bernard	181, 183
近代繪畫史論	198	Lebrun	7
近代の英文學	199	Leconsfield, Lord	149
近代神祕説	197	<i>Lectures in English Literature</i>	200
近世歐洲繪畫十二講	198	Legouis, Emile	163
近世美術	196	Leonard, George	149
近世英文學史(小日向)	201	<i>Leonora</i>	63
「忌憚なき感謝、ウイリヤム・ブレイクを論ず」	186	<i>Letters from William Blake to Thomas Butts</i>	155
小林潜龍	180, 195	<i>Letters of William Blake, together with a Life by Frederick Tatham, The</i>	120
小日向定次郎	192, 196, 197, 201	LIFE MASK OF BLAKE, by Deville	Frontispiece
鼓動	206	<i>Life of William Blake</i> (by Gilchrist)	123, 124
小泉鐵	196	<i>Life of William Blake, The</i> (by Tatham)	120
「小泉八雲全集」	193, 200	<i>Life of William Blake, The</i> (by Wilson)	131
「肯定の二詩人」	182	<i>Life of William Blake, The</i> (by Wright)	131, 147 n.,
小山鬼子三	197	<i>Ligeia</i>	34
工藤好美	197	Linnell, John	30, 65, 66, 72, 113
工藤直太郎	192	Linton, W. J.	123
久米正雄	184	Lithograph	70, 81-2
栗原基	173, 195	<i>Little Black Boy, The</i>	99, 185-6
厨川白村	144, 195, 199	<i>Little Boy Lost, The</i>	182
厨川白村集	198	<i>Little Girl Found, The</i>	210
厨川白村集補遺	199	<i>Little Girl Lost, The</i>	210
開拓者	207	<i>Little Tom the Sailor, The</i>	81
改造	206	LITTLE TOM THE SAILOR, by Blake (白蠟版畫)	132-3
Kyle, Galloway	147	Locke, John	39
京都帝國大學新聞	209	Lord, Teach these Souls to Fly (Colour-print)	159
L'Allegro	113		
Lamb, The	103 n.		
Lamb, Charles	27		
<i>Laocoon</i>	65		
<i>Laughing Song</i>	184		
Lavater	61		
Lawrence, Dr. J.	149, 185		
Lawrence, Sir Thomas	30, 87		

Macaulay	114	Memorable Fancies	36
MacDonald, Greville	149	<i>Mental Traveller, The</i>	27, 117
街	203	Mesmer	47
Maclagan, E.R.D.	118	Michelangelo	3, 4, 7, 68, 69, 95, 96
Malkin	64	湄	206
<i>Man Sweeping the Interpreter's Parlour, The</i>	81	三木春雄	201
MAN SWEEPING THE INTERPRETER'S PARLOUR, by Blake, THE (白蠟版畫)	132-3	三木露風	180, 184, 210
Marginalia	61, 62, 64	未墾地	203
<i>Marginal Illustrations to Young's "Night Thoughts"</i>	71	Milo	157
<i>Marriage of Heaven and Hell, The</i>	12, 55 n., 62, 188	<i>Milton</i>	26, 36, 63, 64, 113, 120
<i>Marriage of Heaven and Hell, &c., &c., The</i> (by Plowman)	132	"Milton"	83
MARRIAGE OF HEAVEN AND HELL, by Blake (着彩浮彫腐蝕版)	66-7	Milton, John	96
正富汪洋	192, 210	「未來」	184, 202
Masefield, John	143	<i>Mirth and Her Companions</i>	71
増野三郎	184	三浦(太郎)	143
松岡讓	184	宮森麻太郎	180
松浦一	196	宮森桃潭	195
松山敏	193	宮崎安右衛門	192
Matthew, Mrs.	11, 61	「水麩」	185, 202
Matthew, Rev. Henry	61	木星	207
Maxwell, Sir John	149	百瀬清志	192
Maxwell, Stirling	149	Montesquieu	40
眞山青果	176	Moreau	67
迷へる羊	205	森鷗外	152
「迷へる兒」	182	Morris, William	67
McNeal, Rev.	147	Moser	7, 60, 69
Mediator, The (Colour-print)	159	<i>Movements in Modern English Poetry and Prose</i>	201
		Muir, William	147, 149
		<i>Muse, The</i>	201, 206, 207, 210
		武者小路實	197, 198, 200
		武者小路實篤全集	197
		<i>Mushin no Ashi</i>	174
		「明星」	178
		mysticism	183

永 見七郎	206	Oberon and Titania	
永 中川孝	192	(Colour-print)	159
中村爲治	192, 200	Oberon and Titania (Platino-	
中西悟堂	192	type)	158
中山昌樹	196	O'Casey	140
Napoleon	22	O'Connor	140
成瀬正一	184	Ode to the West Wind	50
Nativity, The	84	O'Flaherty	140
Nativity, The	150	緒方(健三郎)	143
夏目漱石	175, 193, 195	岡田幸一	192
Nelson Guiding Leviathan	27	岡倉由三郎	192
Nelson Guiding Leviathan		岡本春彦	185
(テムペラ)	84	岡島狂花	196
New and Enlarged Edition		On Homer's Poetry	65
of Gilchrist's Blake, A	123	小野竹三	173, 195
New Popular Edition of		On the Morning of Christ's	
Gilchrist's Blake, A	123	Nativity, &c. (by Keynes)	155
Newton	150	On Virgil	65
Night	97, 98 n.	折れた翼	199
Night Thoughts	63, 128	大阪毎日新聞	209
日本現代名詩集	197	大阪朝日新聞京都版	208
日本詩人	206	押繪	70, 77-81
新潟毎日新聞	208	O'Sullivan	140
新潟週報	208	Otagiri, Y.	199
虹	205	Otter, Sir John	149
「虹のかげ」	174	大槻憲二	192
二年の英語	206	Our Lady, with Infant Jesus	
「野花の歌」	178	on a Lamb, & St. John	
野口米次郎	134, 136, 143, 144	(Colour-print)	159
野口米次郎ブックレット	198	Outhoun	62
Nonesuch Blake	164	大和田建樹	170, 195
Norman, Hubert J.	151	尾關岩二	189, 194
Notes on William Blake	181		
Nurse's Song	182		
		P aine, Thomas	13, 14, 62
		Paintings and Draw-	
小 原要逸	174	ings of William Blake,	
小 歐米名家詩集上巻	170, 195	The	78, 136

Paintings of William Blake,		(by Yeats)	118, 145
The	129	Poems of Evening and	
Palmer, Samuel,	68, 81, 110, 113	Night	199
パルテオン	209	Poetical Sketches	
Paolo and Francesca in the		45 n., 60, 61, 109, 188, 189	
Whirlwind of Lovers (水		Poetical Works of William	
彩畫)	83	Blake, The (by Ellis)	119
Paradise Lost	64	Poetical Works of William	
'Paradise Lost' Series (水		Blake, The (by Sampson)	119
彩畫)	83	Poetical Works of William	
Paradise Regained	30	Blake, including the un-	
'Paradise Regained' Series		published French Revolu-	
(水彩畫)	83	tion together with the	
Parker	61	Minor Prophetic Books	
'Parker and Blake'	12	and Selections from the	
Pascal	39	Four Zoas, Milton and	
Pastorals of Virgil	65	Jerusalem	120
Pars	68, 109	Poetical Works of William	
Pater, Walter	147, 172	Blake, Lyrical and Mis-	
ペーター研究	197	cellaneous, The	116, 193
Payne, John	147	Poetry and Prose of William	
Payne Society	147	Blake	131
Penance of Jane Shore	69	Poetry Review	147
Pencil Drawings by William		Pope, Alexander	39, 40
Blake	132	Premiers Livres Propheti-	
Pickering MS.	63, 188	ques	165
Pity (押繪)	81	Price	13
Pity (Colour-print)	159	Priestley	13
PITY, by Blake (押繪)	66-7	Printed Drawing	78
Plates from the Songs of		Procession from Calvary,	
Innocence (Colour-print)	159	The (Colour-print)	159
Plowman, Max	122, 132, 156	Procession from Calvary,	
Plucking the Flower of Joy		The (platinotype)	158
(Colour-print)	159	Prologue and Characters	
Poe, E. A.	34	of Chaucer's Pilgrims	65
Poems and Prophecies of		Prophetic Books, The	52, 87,
William Blake	122, 156	89, 119, 121, 123, 125, 165	
Poems of William Blake		Prophetic Books of William	

<i>Blake, Jerusalem, The</i>	118	「露風集」	180
<i>Prophetic Books of William Blake, Milton, The</i>	118	Rossetti, D. G.	67, 110, 123, 176
<i>Prophetic Writings of William Blake, The</i>	121	<i>Rossetti MS.</i>	62, 64, 65, 188, 189
<i>Prose Writings (Blake)</i>	188	Rossetti, Willam Michael	27, 110, 117, 123, 124, 193
Protogenes	95	Rousseau, J. J.	40
<i>Proverbs of Hell</i>	115	Rubens	7
<i>Public Address</i>	27, 65	Ruskin, John	72
R aphael.	3, 7, 68, 95	Russell, Archibald G. B.	78, 118, 120, 129
<i>Raven, The</i>	34	Ruth and Naomi (<i>Platinotype</i>)	158
<i>Real Blake, The</i> (by Ellis)	118, 125	Ryland	34
Redon	67, 83 n.	S acrifice of Isaac (<i>Platinotype</i>)	158
<i>Reeds of Innocence</i>	173	雜賀忠義	192
Relief Etching, Coloured and Plain	70, 73-7	西條八十	184, 192, 210
Rembrandt	72	最近英詩概論	199
Renaissance	38, 39	Saint Martin	47
REUNION OF THE SOUL AND THE BODY, by Blake and Schiavonetti, The (腐蝕版畫)	132-3	齋藤佳三	184
<i>Revue Anglo-Americaine</i>	165	齋藤龍太郎	201
Reynolds, Sir J.	7, 64	齋藤勇	185, 186, 192, 196, 197, 198, 200, 210
Richardson	40	櫻井鷗村	183, 195
Richmond, George	68, 81, 110, 113, 114	SAYINGS OF WILLIAM BLAKE SELECTED FROM HIS LETTERS AND PROSE WRITINGS, THE (by Yanagi)	188
Richmond, Mrs.	137	Sampson, John	119, 120, 121
<i>Rights of Man</i>	14	山宮允	161, 166, 167, 184, 187, 188, 190, 192, 194, 196, 198, 200, 201, 210
六合雜誌	202	三方面	197
<i>River of Life, The</i> (水彩畫)	83	三高嶽水會雜誌	185
<i>River of Life, The</i> (<i>Colour-print</i>)	159	<i>Sannin no Utame</i>	173
Robertson, Graham	123		
Robinson, Crabb	30, 66, 108, 40		

佐々木秀光	206	<i>Swinburne</i>	198
Satan and Serpent watching the Endearment of Adam and Eve (<i>Platinotype</i>)	158	<i>Select Poems of William Blake</i> (by Doi)	194
Satan and the Serpent watching the Endearment of Adam and Eve (<i>Colour-print</i>)	159	<i>Select Poems of William Blake</i> (by Sangu)	188, 194
<i>Satan Calling up His Legions</i>	27	<i>Select Poems of William Butler Yeats</i>	201
<i>Satan Calling up his Legions</i> (テムペラ)	84	Senefelder, Aloys	82
<i>Satan Exulting over Eve</i> (押繪)	78	<i>Seven-Page MS.</i>	60
<i>Satan Smiting Job with Sore Boils</i> (テムペラ)	84	<i>XVII Designs to Thornton's Virgil</i>	113 n.
佐藤春夫	192	香瀨都	206
佐藤顯彰	192	<i>Shadowy Waters, The</i>	144
佐藤清	135, 192	Shakespeare, William	49, 96
澤村助教授	134	寫樂	137
Schiavonetti	28, 29, 64	Shelley, P. B.	34, 49
Schofield, John	22, 63	Sheridan	40
Seagrave	25	詩	203, 205, 206
「生長する星の群」	204	詩嶽に登る	198
聖化	209	詩學雜考	199
生活者	206, 208, 209	繁野天來	192
生命	204	詩百篇	198
制作	202, 203	詩人	202
西洋美術の知識	198	卜榮晚	192
世界美術全集	201	新潮	178, 203
世界文學物語	199	新英語	204
世界名詩寶玉集	198	詩の泉	203
<i>Selections from Palgrave's Golden Treasury</i>	201	神秘思想と近代詩	198
<i>Selections from the Writings of William Blake</i>	118	「新思潮」	184, 202
<i>Select Poems A. of C.</i>		新進詩人	203, 207
		詩聖	204
		詩神	206
		「詩神文庫」	18, 185
		思想家人名辭典	201
		思想を中心とする英文學史	200
		新城和一	184
		「白樺」	
			154, 181, 182, 186, 202, 203

Vision of Jacob's Ladder, The (Colour-print) 159	William Blake (by Burdett) 127
Visions of the Daughters of Albion 12, 62	「ウィリアム・ブレイク」(幡 谷) 189, 194
Voice of the Devil, The 56, 93 n.	William Blake (by Symons) 126, 185
Voices of the Stones, The 141	William Blake (by Yanagi) 154
Voltaire 40	「キリアム・ブレイク」(柳) 131, 182, 183, 186, 190
若月紫蘭 173	William Blake and the Imagination 110 n.
Waley, Arthur 134, 143, 144	キリアムブレイク複製版畫展 覽會目錄 210
Wallis, J. P. R. 121	William Blake, His Life and Personality 148
早稲田文學 202, 203, 204, 207	William Blake, His Mysti- cism 16, 4-5
早稲田教育 205	William Blake, His Philo- sophy and Symbols 126
私達 204	William Blake, Mystic, a Study 128
渡邊正知 188, 189	William Blake, Mysticism et Poésie 126, 155, 160
和辻哲郎 181	William Blake, Poet and Mystic 126
Weirz 67	「キリアム ブレイク書誌」 132, 183, 184 n., 190, 193, 210
“WHAT IS MAN THAT THOU SHOULDEST TRY HIM EVE- RY MOMENT,” by Blake (低彫版畫) 132-3	William Blake, Studies of His Life and Personality 127, 148 n.
“WHEN THE MORNING STARS SANG TOGETHER, AND ALL THE SONS OF GOD SHOUTED FOR JOY,” by Blake (低彫版畫) 132-3	「ウィルヤム・ブレイクと彼の 神曲の挿繪」(イエーツ) 184
Whitman 182	「ウィルヤム・ブレイクと想像」 (イエーツ) 184
Wicksteed, Joseph H. 128, 131, 149	ウィリアム・バトラ・イエイツ 研究 200
Wilberforce 114	Wilson, Mona 131
Wild Flower's Song, The 178	Winter's Tale 49
William Blake: A Critical Essay 124, 175 n.	
William Blake (by Binyon) 128, 138	

Wise and Foolish Virgins, The (水彩畫) 83	柳宗悦 135, 154, 157, 181, 182, 183, 186, 187, 188, 190, 194, 196, 197
Wisdom of Angels 62	柳澤健 144, 184
Why Men Enter Heaven 53	矢野峰人 185, 192, 199, 201
Wood, Polly (or Clara) 7, 60	矢代幸雄 135, 136, 185
Woman taken in Adultery, The (Platinotype) 158	Yeats, William Butler 51 n., 53 n., 88 n., 90 n., 109, 110, 117, 118, 125, 135, 138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145, 181, 184, 185, 196
Woman with an Issue, The (Platinotype) 158	横山有策 192, 200
Wood Engraving or Wood- cut 70, 81	讀賣新聞 207
Works of William Blake, Poetic, Symbolic, and Critical, The 117, 146	吉田絃二郎 192
Wollstonecraft, Miss 13	吉田泰司 199
Writings of William Blake, The 121, 155	Young, Edward 63, 128
Wright, Thomas 131, 146, 147, 149, 151	Young 70
譯註現代英詩鈔 196	Young's Night Thoughts (Platinotype) 158
山田耕作 180, 184	
山本智洞 192	「夕づつに」 173
山本有三 143, 184	湯山清 192
「病める薔薇」 178, 180, 182, 192	Zamiel 125
	善惡の觀念 196

山宮允著

—...◐◑ プレイク論稿 ◐◑...—

定價金三圓三十錢也

昭和四年十月廿五日印刷

昭和四年十月廿八日發行

東京市神田區通神保町一
發行兼印刷者 株式會社 三省堂
代表者 神保周藏

東京市外蒲田
印刷所 株式會社 三省堂蒲田工場

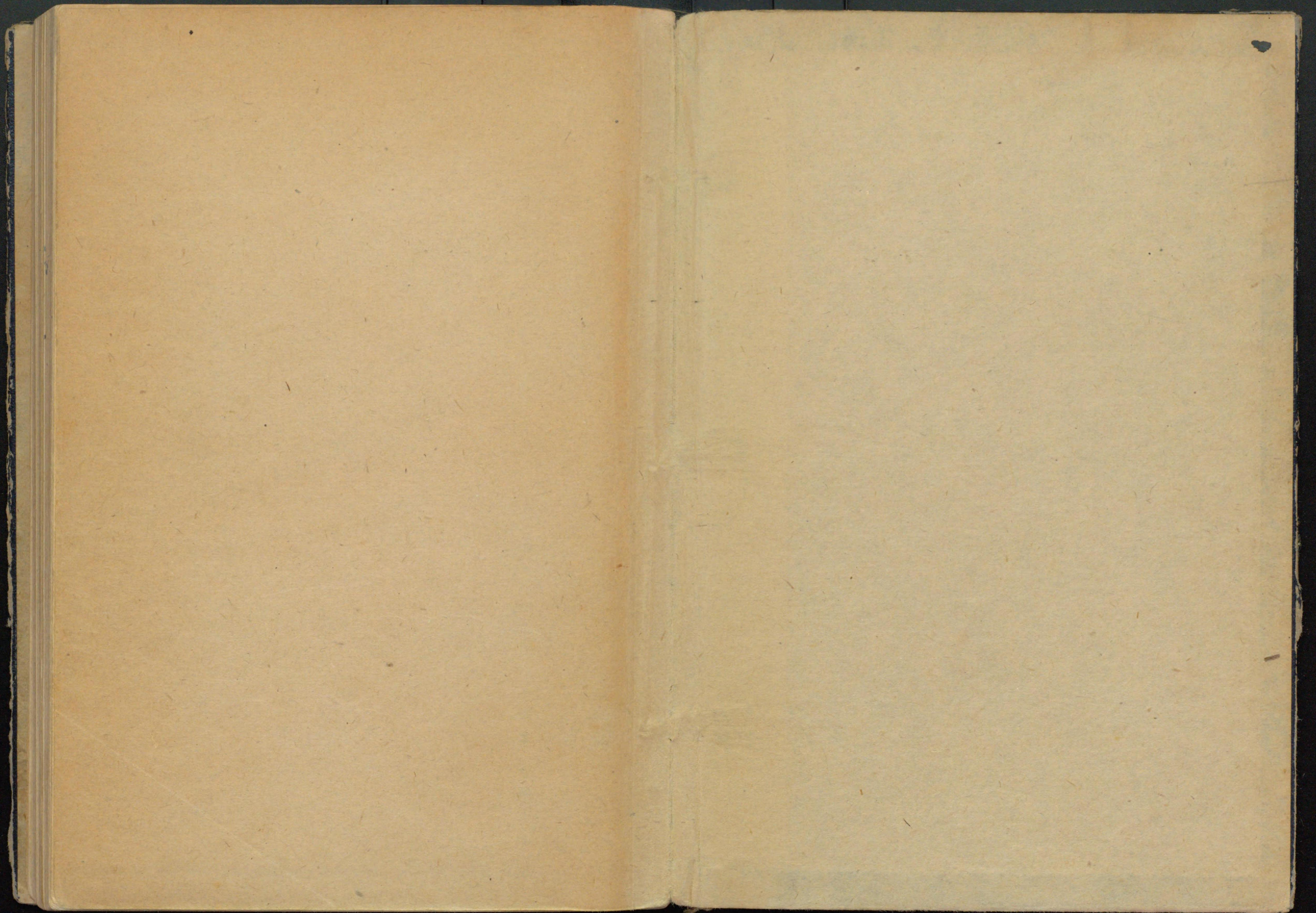
東京市神田區通神保町一
發賣所 株式會社 三省堂
振替東京三一五五五

大阪市南區頓慶町通一ノ四一
株式會社 三省堂大阪支店
振替大阪八一三〇〇

298 K

山宮允著
グレイク論稿

三省堂上梓



585-99



1200501523738

585

99